
サモンナイト【オリ主憑依モノ】

白霧島

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サモンナイト【オリ主憑依モノ】

【Nコード】

N4241R

【作者名】

白霧島

【あらすじ】

人生なんて二度も要らない。

一度きりの人生だからこそヒトは精一杯に努力をする。

生き足掻いた人間にとって、想定していない二度目の人生など面倒なだけだ。

少なくとも、当時の俺はそう思っていた。

タイトルの通りサモンナイトの憑依オリ主物です。
序盤は原作キャラがあまり出ません。

初作品ですのでゆっくり書いていこうと考えていますが、最低でも月に一回は更新できるようがんばります。

感想や意見をくれるとありがたいです。

プロローグ（前書き）

プロローグなので短めです。

プロローグ

曇り空。

灰色の綿にも見えるそれに覆われた世界で少年は彷徨う。

見下ろせば交差点。

そこでは多くの人がそれぞれの目的のために足を動かしていた。

ふと少年は、自分の居る場所について考える。

足どころか身体中に感覚はなく、しかし視線と思考は世界を見下ろしている。

気付く。

遙か遠くに見える真つ赤に染まった自身の身体に。

後はほとんど拍子に思い出す。

自分がトラックに轢かれ死んだこと。

轢かれた際に激痛を感じ、感じた瞬間に意識が身体から剥離して宙を舞ったこと。

そして、自分が努力したこと。

「やってらんない。何さ？ この結果は」

一度きりの人生だからこそ勉学を学び、身体を鍛え、友達と遊び、色々なものに感動し、喜び、悲しみ、怒り、そして楽しんだ。

未来と今をよく生きるために。

しかしその人生は終わりを告げた。

よく生きた少年の人生はまるでシャボン玉の様に、壊れて消えた。

少年に残っているモノは怒りでもなく、嘆きでもなく、虚無感だった。

自分の人生が終わったと考えた途端に、なにかもが面倒になってしまったのだ。

「これから、何をしよう？ 全て終わったし、後は消えるだけなのだろうけど」

休もう。

人生に疲れたのではなく、終わったということに疲れた。

そう少年が考えたとき、

「ッ！？」

眼球と脳を通さずに得た視界に強烈な光が射した。

少年は一瞬慌てたが、直ぐにどうでもよくなり、そのまま光に飲まれた。

……その先が、面倒くさい第二の人生だとも知らずに。

一話

荒野。

そうとしか表現できないほどの荒野が目の前に広がっている。ついさつき死後の感覚を体験したばかりだというのに、またもや俺は不思議な体験をしていた。地平線から太陽が昇る光景が見えることを考え、今の時刻は早朝と断定。辺りを陽光が照らしていく。

「ん？ …おいおい、これはいったいどういう事だ？」

陽光は余計なものまで照らし出した。

先ずは身体。

簡潔に言えば縮んでいた。詳しく言えば、手足のサイズからして五歳くらいだろうと推測、服装は絹に似た繊維で出来たローブの様なもの、性別は股間についているモノからして男と断定、といったところだ。

次に状況。

荒野だと思ったのは前ばかりを見ていたからで、振り向いてみればそこは廃墟と化した街だった。廃墟と化した街の至る所から煙が出ていて、まるで中東の紛争地帯のようだ。

更に足下。

自分の立っている場所を中心に魔法陣の様なモノが描かれており、陣の周りには今着ているローブと似た服を着た大人が倒れ伏している。死んでいるのかもしれないが今の俺には余裕がなく、確かめる勇気もない。

そして、宝石にも似た光を放つ不思議な五種類の石。
その石の特徴に覚えがあった。それぞれ黒、赤、紫、緑、白からなるその石の特徴を俺は知っていた。

「まさか、サモナイト石？」

サモナイト石。

それはサモナイトシリーズと呼ばれる作品の中で最も重要なアイテムと言える物だ。モナイト石は石の色事に違うそれぞれの世界から召喚獣を呼び出すために使われる。そして、召喚獣を呼び出す術を召喚術と呼び、召喚術を行使する者を召喚師と呼ぶ。

「二次創作かよっ！ と突っ込みたくなるな。前は嵌ったりもしたが、実際に体験すると割とどうでもよく感じる」

俺は結果的に二度目の生を獲得した訳だが、前回の様に頑張ろうとは思えなかった。これじゃあゲームの二週目プレイじゃないか。

「偶然の二度目かも知れないが、これでは本当にゲームみたいで最低だ」

一度だから貴く感じられた自分の人生、二度目に価値など感じられるはずがない。そもそも俺は精一杯生きた。虚しいが後悔は無い生き方だった。

「だが、無闇に自分の命を絶つのは愚かだ」

生きたくても生きられない人間。

生前のもっとも親しい間柄だった友人は言った。曰く、「未来に挑むチケットを持っていることを誇りに思え」と。ソイツは命の大切

さを噛みしめながら生きていた人間だった。
ソイツにとって生きることとは苦痛との闘いであつた。決して治ることのない病だと申告されたソイツは、

「そう簡単には死んでやらない。俺を殺そうとする病魔がいると考
え、その困る顔でも想像しながら日々を過ごし、夜を越え、そし
て朝を迎えたら笑うんだ。またお前は俺を殺し損ねた、間抜けめつ
てね」

と言つて皮肉げに笑つた。

俺はソイツのそんな考え方が格好良いと感じ、尊敬していた。この
生はそんな奴がもらうべきだろうに。もしも世界に神様がいるなら
ば、それはそれはいい性格をしているに違いない（性格が良いとい
い性格は違う）。

「ハア。それなりにいい人生に成るようこれから生きよう。だい
たいよく生きるのは疲れる、前回で懲りたさ」

方針が決まつた。

ソイツはきつとまだ病魔と闘っている。ただ一人、苦痛と孤独に立
ち向かう奴の背中が思い浮かぶ。ハンデを抱えても最後まで生き抜
こうとする奴がいるのに、一度死んだだけで今生きている事実を捨
てるのは何か悔しいから。だから、俺はこの世界で程々の幸せを手
に入れる。たつた今そう決めた。

願わくば、次こそは安らかな死を。

太陽が真上に昇る頃、俺は廃墟を散策していた。途中で挽肉になった人間の死体を幾つか見て吐いたが、それも十を数えてからは気にならなくなった。

「よっこらせつ。さて、戦利品を調べるか」

俺は生きてる水道のある広場を見つけ、廃墟から持ち帰ったものを順に並べていった。

「えーと？ 剣が3本、短刀が5本、投げナイフの様な刃物が計26本、槍が2本、杖が5本、リボルバータイプの拳銃が一丁、それ用の弾が百発入り一箱、缶詰の色違いが三種類それぞれ十個ずつ、皮製の鎧みたいな物が一つあるが俺には大きいな。後は、多分これは救急セットってやつだな」

他にも衣類や本、調理器具を代表した雑貨が多々集まった。廃墟には食料や武器もまだまだあるだろうから、一ヶ月は生きていけるだろう。

「じゃあ、まずは寢床の作成と警戒用のトラップ、火種の用意と銃の試射をしておこうか」

瓦礫を運び、組み立て、一つの部屋を作る。そこに廃墟巡りで手に入れた布団やクッションを敷き詰め寢床は完成した。

雑貨置き場の中から空き缶と糸を引っ張り出し簡易的な警報装置を

作成。縄張りを作るように寝床から凡そ五百メートルの地点に設置する。とはいっても広場には瓦礫で壁ができており、その隙間に道が数本ある状態なので罫を張るのは割と簡単だった。

火種は未使用のジッポライターがあつたので、布や燃えやすいものと角材を置き火をつける。角材は崩れた木造の家から拝借。

ふうと、一息つき、顔の汗を腕で拭ったとき、違和感を感じた。

「な、んだこれ？ 角？」

人間には有り得ない特徴、耳の上辺りから四十五度後ろ斜め上に向かって伸びる硬質な突起物。

恐らくは鬼か悪魔の角。どうやら俺は人外に憑依したらしい。そういえば、俺は今の自分の容姿を知らない。そう思い雑貨の中から金盥を引つ張り出し水を汲み自分の顔を見た。

髪の色は黒く肩口まで伸びていて、眼の色は赤い。

顔立ちは年齢からか中性的、髪の長さも合わさって男にも女にも見える顔をしていた。

そして角。

角はクロノクルセイドという作品に出てくるクロノという悪魔に生えているものに似ている。ならばこの角は悪魔のモノなのだろう。形状的に生活の邪魔にはならないので大助かりだ。

身体を調べてみれば見た目よりも頑丈で力もあることが解った。瓦礫を運んだときに疲れないなと疑問に思ったが、かなり筋力があるらしい。他にも身体の表面に浮き出ている発光するラインなど気になる点が多々あるが、まあ、銃を撃ったり剣を振ったりするのは困らないだろう。

「次は、銃の試射だな」

辺りは日が傾き、影が伸びて暗い色に世界が支配され始めている。拳銃は銀色の鋭利な光を放っている。昔ネットを漁っていた頃にこれと似たものを見た覚えがある。

コルト・パイソン。

1950年にアメリカのコルト社によって製造された、357マグナム弾という強力な弾丸を撃てる拳銃である。バレルの長さは恐らく6インチ、マグナム弾を子供の腕で撃って大丈夫な筈はないが、たぶん大丈夫だろう。

カチャリ

シリンダーに弾丸を装填し、ハンマーを起こす。

腕にズッシリとくる重みには、まるで銃が俺を信じると囁いているような錯覚すら覚える。

両手でしっかりと拳銃を構え、的に向かって照準を合わせる。的は瓦礫の上に置いた空き缶、距離は凡そ20メートル。それに向かって引き金を引いた。

ダン

銃声

弾丸は空き缶の上部を掠め、遙か後ろの瓦礫に命中した。

銃を撃つと同時に腕のラインがオレンジの光を強く放つ。そして銃を撃つたにも関わらず反動をあまり感じなかった。体中に刻まれているこのラインは衝撃の分散、あるいは筋力を強化するものだろうと考察する。

「分散か、強化か。…よしっ、試してみるか」

パイソンを一旦地面に置き、広場にある石でできた円柱に向かう。
足で地面の感覚を確かめ、円柱に向かい、

「破あつ！」

気合いの入った掛け声と共に蹴りを放つ。

左足を軸にし回転しながら右足を横入りに叩き込む。

一般にミドルキックと呼ばれるそれは結果、円柱を蹴り碎いた。

啞然とする。

足に刻まれているラインはインパクトの瞬間、同色の光を更に強く
発した。そして足には何のダメージも見られない。あるのは蹴った
手応えだけだった。

蹴りを放ったときの感覚を思い出し足に意識を集中するとラインは
発光し、その状態で幅跳びをしてみると五メートルも跳んでしまっ
た。

これらの結果から、現時点でのこのラインの効果は分散と強化の両
方なのだろうということが解った。これではぐれ召喚獣や野党に遭
遇しても生き残る可能性が上がった。

「俺の状況は滅茶苦茶だが、取りあえず生きていける。それなりに
人生を楽しむ為のスタートがこれなら、まあ、悪くないな」

角材や瓦礫を積み上げただけの椅子に腰掛け、黄金の光を放つ缶詰
めを開けた。中からはカレーのような匂いが漂い食欲をそそる。

「考え事をするにも、まずは栄養が必要だな。頂きます」

一口食べてみると香ばしい辛さが口の中に広がり、その美味しさに俺は缶詰めを一気に平らげてしまった。

「…ご馳走様でした」

とても美味しかった。食後に「美味すぎるっ!!」と声を上げてしまっただけに。

「ん？ うぐっ！」

満腹と共に体中に力が漲る。一分ほど身体の中を駆け巡る熱に困惑したが、やがてそれも沈静化する。

「一体なんだったんだ？ あの感覚は」

しばらく考えようとしたが、満腹による眠気に襲われ俺は意識を手放した。

缶詰の正体がサモ缶だと気付いたのは、缶詰を全て食べ終わった頃だった。

「…ん」

起床。

とは言うものの、辺りはまだ暗い。

早朝、日はまだ出ておらず角材に火をつけ暖を取る。
荒地の朝は寒い、この身体にはハンデにならないようだ。

朝食（銀の缶詰はサラダ味だった）を食べた後、昨日よりも若干弱い熱が体内で暴れたがそれもすぐに治まり俺は活動を始めた。

今日の活動内容は身体に浮き出るラインの考察と検証、サモナイト石の回収とそれが使えるかの実験といった具合だ。

時間は跳んで昼。

ラインについて解ったことを纏める。

まずこのラインは前提がエネルギーの循環回路の様な物なのだろうことが解った。

ライン（以下、回路と表記）が発光したときの感覚を思い出し腕に意識を集中させると回路が発光した。この状態では身体能力が強化される効果と物理的ダメージを軽減する効果が同時に作用していることが今までの経験から解った。

同じ要領で眼に力を集中すると動体視力が上がり、それと同時に恐らく回路を循環しているエネルギーと同質のものの流れに眼の焦点が合うようになった。

エネルギー、この世界では魔力と言うのだろうそれは粒子状で大気の中を波の形に集合して漂っている。

回路を流れる魔力は角が吸収装置の役割をし大気から魔力をたぐり寄せていた。

・・・クロノクルセイドに登場する悪魔そのものだった。

まあ、そんなこんなで回路の使い方をいろいろ試すうちに身体の見え目を人間に戻すことに成功した。これは普段回路に流れている魔力を抑えるだけで見た目と身体機能を見た目通りにする事ができた。この事から、この身体は響界人が召喚兵器の実験体だったという推測をたてた。

そこまで考えたそのとき、

カランコロン

警報が鳴った。

二話（前書き）

地震とか津波とかで色々大変。

家の一階が水没したが、今自分が生きていることがとても嬉しく感じられた。

というわけで二話。

次の更新は遅くなりそうです。

二話

無法者。

盜賊や外道の総称だがこれ程奴らを表すのに適した言葉はない。経緯がどうであれ、法を破ると言う行為を行った時点で人は無法者になる。法を破るものは法を破るが故に法に守られない。

そして今日から俺も無法者に成る。

当然だろう。殺さなければ殺されるのだから。

「た、助けてくれっ!!」

今、俺の足元には右腕と右足の折れた盜賊が転がっている。周りには盜賊の仲間だったであろう男達の死体が横たわっている。

そう、俺はこの世界に来て初めて人間を殺し、殺した相手の死を実感した。悲しくはないが、それは酷く、気分が悪くて、怖かった。

静かに急ぐ。

瓦礫に足を捕られて転ばないよう、音を立てないよう細心の注意を払いながら警報が鳴った場所へ忍びながら急ぐ。

「…見つけた」

静かに呟く。

数は五人。相手はまだ気付いていない。

俺は瓦礫の影に移動し、相手の様子を窺う。相手との距離はあまり離れていないが、気付かれないよう聴覚を強化して音で相手を探る事にする。

右手に持った拳銃に力が入る。

場合によっては相手を殺さなければいけない。殺人への忌避の感情が生まれ、緊張からか額に汗が滲み出る。

「ここら辺で煙が見えた。近くに生き残った奴がいるはずだ、探せ！」

「兄貴、見つけたらどうすんですか？」

「決まってる。男なら殺す！」

「女なら？」「もちろん殺す」

「分けて言った意味ってあるんすか？」

「特にねえ」

：なんてこつたい！ テンプレ通りの悪党だよ、絶対話し合いになる前に殺し合いになるよ！

息を潜めながら心の中で大絶叫。さっき見た盗賊の装備からして召喚師はいないだろうが多勢に無勢だ。状況は圧倒的にこちらが不利。間違いなく死ぬ。

頭の中が混乱していく。脳内で死んだときの記憶が再生され始める。

（あ、）

激痛、反射的に掲げた腕が拉げて、まるで玩具の様に転がり、転がっている間も足が折れ、腹から肋骨が突き出て、

（ああっ、ああああああ、あ）

終点、転がり続けた先は電柱、そこに顔面からぶつかり、

(あつ、ぐう、うううううううううううう、)

そして、死んだ。

今まで正常な精神を保って居られたのは、ただ単に死の瞬間を忘れていたからだっただのと気付く。

辛い、怖いといった感情を押さえ込むように蹲る。カラン、と手から銃が滑り落ちるもそれにすら気付かない。

恐慌。

(や、ヤバイ、怖い、怖い、死が怖い、死の瞬間が怖い、嫌だ、恐い、死がこ、死、死死死死死死しししししししししししし)

「ようガキイ、そんなところでガタガタ震えてどうしたよ」

ブツン、と理性の糸が切れた。

「嗚呼アアアアアアアアアああああああアツアアアツアア
あああああつつつ!!!!!!」

悲鳴。叫び。

回路に魔力が満ち、人を外れる。生物に備わる防衛本能の下、男に殴りかかる。

「な、何だこいつ」

殴られた男の顔が弾け跳び、その肉を辺りに撒き散らす。その様子を他の男たちは呆然と見つめる。だがそれも一瞬、

「ば、化物だあ!!」

雲の子を散らす様に男たちは一斉に逃げ出した。

だが遅い。今の少年は正しく化物であり、生き残るなら背を向けてはいけない存在だった。

ドゴン

一蹴り

地面を一蹴りすると化物は弾丸と化して男の背中を襲う。腰に突撃を受けた男は下半身の神経がいかれたのか地を這って逃げようと試みるが、頭を踏み砕かれて絶命する。

化物は止まらない。

顔を動かし次の目標を見つけると的に向かってさつき殺したばかりの死体を投擲する。

「うわあっ!!」

投げた死体は見事男に命中し男は転倒する。転倒した男は冷静だった。

ゆっくり近ずいてくる化物に怯えて身を竦ませるフリをし、腰に挿してある剣を相手に見えないように抜く。

「ひ、ヒィっ!?!」

演じる。

滑稽な道化師のように恐怖を演じ、相手の隙を窺う。

一步、二歩、三歩。

演じる一方で近づくそれへの恐怖を確かに感じながらも、それを沈

め好機を待つ。

瓦礫に足を捕られ、一瞬だけ敵がよろける。

(・・・・・・今だっ！)

それを好機と見た男は化け物に剣を振るう。

カキン

絶望感

相手の脇腹に振るわれた一撃は肉を斬るところか皮膚すら通らない。しかし、その一撃で化け物は理性を取り戻す。

そして自分が死を恐れて理性を飛ばしていたことに驚愕し、それでも本能は止まらない。

腕は剣を奪い取り、そのまま相手の心臓に突き立てる。

絶命。

自分とは違い簡単に死ぬ男。それを見て少年は自分が死なないことを確信する。

この状況での死を自分が支配したことに安堵し、本能は漸くその働きを止める。

「残り、二人」

口に出し目標を確認する。

回路により強化された思考はヒトとしての倫理観を抑圧し、行動を開始する。

刺したばかりの剣を引く抜く。引き抜いた拍子に噴水の如く鮮血が

噴き出す。それらは返り血となり、少年のローブを赤黒く斑に染め上げる。

引き抜いた剣を二人居る方の一人に投げつけ、足の回路に魔力を流し跳躍。

投げた剣は回転しながら飛んで男の頭にスイカをかち割るように突き刺さる。

それと同時にもう一方の男の前に降りる。

「ああっ！？！？」

男は驚き尻餅をつく。

尻餅をついた男の脚を踏み潰す。

聞くに耐えない悲鳴を上げる男は潰れた片足を引きずりながらも逃げる。

（こいつは殺さない。まだ）

逃げる男の襟首を掴み持ち上げる。

「・・・答えろ」

次いで男の右腕を掴み、握り潰す。

「ここで、なにが起きたあっ！！」

理性を取り戻すも、未だ決壊した感情は収まらない。

死を想起した事を切欠にあらゆる感情が蘇り、状況の異常に対する不安が怒りと言う形で爆発した。

この盗賊の男の話はこうだ。

この街は工業都市で、住民には多大な圧力が掛けられていた。そんなとき流れの召喚師が一人街にやってきた。

その召喚師は住民に召喚術を教え、都市に反乱を起こした。

反乱の終盤に町にきた召喚師の仲間と思われる召喚師達が強力な召喚術を使用。

街は瞬く間に壊滅。

それから逃げ延びた住民を襲い事情を聞き出し、こいつらは火事場泥棒に來たといった具合らしい。

「た、頼む！ 見逃して」

最後まで言わずに首をねじ切る。

盗賊の話聞いてる内に感情は収まり、これ以上有益な情報を引き出せないだろうことから殺害。

行動を躊躇いはしないが自分が、これまで積み上げてきた倫理観がボロボロと崩れていく様に苦痛を感じる。

俺は初めて生きることが辛いと感じた。

三話（前書き）

作者暴走の回その1。

廃墟でサバイバルの描写が飽きたために、飛ばしてオリヒロインと
かオリ設定とか出しちゃったり。
そんなこんなで第三話どうぞ。

三話

寂しい。

人を殺し、廃墟で暮らす内に俺は孤独に耐えられなくなっていた。会話をしたい。

他者の温もりを感じたい。

この孤独を表現するとしたら寒いという形容詞が最もしっくりくるだろう。

いつもひとりだった。

圧倒的に不利な病を背負いながら生きる親友の姿に憧れ己の人生をより良いものにしようと努力した。

だがそんな自分の心境を人に話したことなどない。

結果を優先するあまり過程を蔑ろにしたせいで本当の友達が出来なかったからだ。

人の話を聞きそれに意見を述べることでコミュニケーションと他社の思考形態を学ぶが自分の悩みなどない為に思想を共有することができない。

共有することができなければ分かち合う喜びと縁を知ることではなく、そのまま孤独へ疾走する。

そして人は孤独とは相成れない。

倫理観に傷を付ける殺人という行為により、孤独に耐えてきた精神は耐久の限界値を振り切り今にも崩れそうになっている。

故に手は自然にそれを目指す。

その震える手には紫の光を放つサモナイト石。

召喚術など使ったことはない。

だが、もう耐えられない。冷静に召喚術を分析する時間すら惜しい。

祈るように、サモンナイト石を包み込む。

願うは孤独からの解放。

「誰か、誰かそばに居てくれ…」

身体中の回路が発光し、サモナイト石に魔力が供給され、そして奇跡は起きた。

眩い光を伴い異界の扉が現れる。

その姿は、一人の可憐な少女であった。

（ jump stage ）

逃れようのない死に直面したとき、人は自分のことしか考えられなくなる。

もしそれが出来ないようであれば、そいつは生命として破綻した何かだ。

それが、

ダン

発砲

ここ数年、人の命を食い潰して生きてきた俺が考えた生物として正しい人間の在り方である。

「……外道召喚師グループの始末を完了。取り敢えず撤回」

この世界にきて早数年、俺は対召喚師戦に定評のある傭兵として生きていた。

召喚師、戦闘においてゲームで言うところの魔法使的ポジションに居る奴らは大抵近ずかれる前に相手を倒す戦法を取る。

強大な力を持つ召喚獣が居れば、最終的に自分は動かずに戦闘を終えることも可能になる。

故に、接敵するという工程を無視し人間の目視できない速さで相手を攻撃する銃は対召喚師の戦闘において強いアドバンテージを持つ。現在所持しているコルトパイソンは元から人の頭蓋を挟むだけの威力を持ち、更にここ数年でした魔改造のせいでワイバーン種に致命傷を与えられる程の威力に成っていた。

そんな武器を持っている俺だが、集団に囲まれると弱い。

パイソンに装填できる弾数は六発。

それ以上の数の召喚師に囲まれれば召喚の時間を与えてしまい、酷い目にあうことは容易に予想できる。

故に奇襲を心掛ける。

ターゲットが一人か二人の時を狙い静かに殺す、または逃げられない程の傷を負わせ敵の情報を引き出した後に殺す。

そんなことにもここ数年で慣れきってしまった。

昔、誰かが人の命は地球より重いと言ったが、そんな価値観は倫理観という名の秤が無くなればたちまち変わってしまう。

それに、確かに重いかもしれないが命はそれ以上に脆い。

脆い命は壊すことが容易で、俺の手は一ヶ月も経たない内に血みどろになっていた。

だが、そこまで血に塗れていても、俺は生きていたい。

そんな風に今思えるのは、俺の心を支えてくれる存在が居たからだろう。

「マスター」

暗闇に包まれた路地裏に響く鈴を転がした時の音にも似た、耳に心地良い声。

「クライアントへの報告は完了しました。報酬はいつもの場所に、と」

虚空に術式が現れ、その少女は姿を現す。
年の頃は十歳くらい。

長く、墨を流したような黒い髪。

その幼い肢体は黒と灰色のメイド服に包まれており、頭にはメイド服とは違い白を基調にしたヘッドドレスをつけている。

顔立ちは幼さの中に妖艶な何かが混じり、妖しい魅力を持つ。

表情は無表情にも見えるが少ない感情の色が見て取れる。

「ご苦労だったな、リーナ。後で、何か美味しいものでも食いに行こうか？」

問うとその少女、リーナは顔を朱に染めもじもじと発言した。

「……でしたらマスター。パルチザンの新作を、食べに行きませんか？」

勘違いする事なかれ、パルチザンとはケーキ店の名前である。
名前の由来はこの店のマスターが冒険者時代に振るっていた槍の種類からきている。

その店のマスターは鬼と人の響界人でありその自慢の腕力を使い、三メートルもある槍を軽々と振り回し敵を圧倒していたとか。

彼曰く「匹夫共が、俺の間合いは貴様等が易々と入れるほど安くない」とか。

リーナはその店のケーキが気に入り、俺はそれを任務の終わった後に労う気持ちを込めて買い与えたりする。

一生懸命ケーキを食べている時のリーナの顔が可愛いからということもあるが。

「解った、新作はレアチーズケーキだっけ？　じゃあ今から行こうか」

「……はい、ますたー」

リーナは朱に染まった顔を俯かせ俺の着ている服の袖を握る。

その表情には期待の色が見え隠れしている。

ケーキを食べ終えたリーナと俺は家へと帰る。

途中の店で夕飯も済ませ、家につくとシャワーを浴びてそのまま寝る。

今回の依頼は達成まで三日も掛かり、疲労もかなり溜まっている。

家は街の一般住宅街にあり、部屋も複数あるためリーナにも部屋を与えているのだが、リーナは一緒に寝ると言って聞かない。

まあ、別に嫌と言っわけでもなく、温もりに触れながら眠るのは心が安らぐのでそのまま寝ていたりする。

「お休み、リーナ」

「はい、お休みなさいませマスター」

愛する人の笑顔を見ながら眠りにつく。

ああ、悪くないな。

〔 another side 〕

朝、カーテンの間から差し込む光に照らされ目を覚ます。

「……………おはようございます、ますたー」

隣に眠る我が最愛の主人に挨拶をし、その胸へ倒れ込む。

「ますたーの、匂い」

無礼だと思いつつも、マスターの胸板に顔を埋めその匂いを嗅ぐ。
夜の内に寝汗を掻いたのか、少し汗の匂いがする。

「んう、スウー」

息を繰り返すとマスターの匂いで胸が満たされ幸福な気分になる。

ああ、ダメだ。

止まらない。

はしたない。

マスターが寝ている間にこんな事、でも。

「（モゾモゾ）」

胸板から首筋に移り匂いを嗅ぐ。

首筋は汗の匂いが強い。クラクラする。

次に髪の毛。

昨日洗髪した時に使った石鹸の匂いがする。ドキドキする。

そこから腋の下に顔を移し匂いを嗅ごうとしたその時、

ムギユウ

強い抱擁

寝返りをしたマスターに抱き抱えられてしまう。

マスターの、体温。

とても温かくて、安らぐ温度。腕をマスターの首に伸ばし、抱き寄せる。

そういえば、

「初めてあったときも、マスターと抱き合いましたね」

思い出すのはその泣き顔。

奉仕精霊と呼ばれる私の一族は戦闘、家事、教育の三つの項目において指導を受け、どれか一つの技能を規定値で修め、その後主人に

対する礼節を学び一人前となり天使や悪魔、稀に召喚師に仕えてその一生を過ごす。

私は言わば天才で、三つの項目をわずか一年で修得を通り越し、そこから独自の技法を編み出し一族始まって以来の才女として羨望と嫉妬の視線を集めた。

しかし問題があった。

それは誰に対しても学んだ礼節を発揮せず、私は誰にも仕えなかったからだ。

当然だ。

私を道具としか見ない奴に仕えるのが嫌だからだ。

私は、やろうと思えば何でも出来た。中級クラスの天使や悪魔を苦戦せずに倒せる実力と才能を持っていた。

誰かに見てもらいたかった私は才能に胡座をかかず、死に物狂いで努力した。

だが皆が見るのは能力や性能のみで余計に私を見てくれない。

そして行き過ぎた才能と努力は私を孤独にした。

私を求める者は増えたが、それは私の力ばかりを見て私自身の心を見てくれない。

だがよく考えれば初めからそうだった。才能を見せれば皆そればかりを見ていた。親ですらそうで、友達と呼べる存在も居なかった。

孤独。

私は温もりを求めながら温もりを知らなかった。

敵はすべて殺したが味方など居ない。

私の存在する意義とは何か？

その問を思い浮かべたとき、私の前に異界の門が開かれた。

それはとても暖かい光を放ち私に希望を与えた。

世界が違うなら、私の存在意義も見つかるかもしれない。

そう思い私は召喚に応じる。

門くぐり抜け、光が止んだ時に目に映った我が主は目に涙を湛え私に懇願した。

〃 傍に、居てくれっ、

私は異界に来た瞬間、解答に到達した。

これだっ！ これこそが私の求めた、揺るぐ事なき存在意義！

力とか、技能とか、そんなものではなく、価値を求めず、ただ私を求めてくれた。

狂喜。

気が狂うほど嬉しい。

私は、私を召喚した彼を抱きしめ耳元で囁いた。

「契約しましょう。あなたが私を求める限り私はあなたの傍にいます。私の名はエルリーナ。我が主であるあなたの名は？」

「……じ」

彼、マイマスターは強く私を抱き返す。

それは奉仕と言うよりも隷属に近く、仕えるという契約よりも愛するという束縛に似た何かを私に刻んだ。

「城之崎、恭治っ！」

彼がその名を告げる。

「ここに契約は完了しました。今後とも宜しくお願いいたします。マイマスター」

私は確信した。

この先マスターと私は幸せになると。

あの時のマスターに私は救われたが、同時にマスターも私に救われた事を後で知る。

そこに運命的な何かを感じたりするのは些か少女趣味な気もするが、それでもそう感じずにはいられない。

そしてその何かは次第に愛情へと姿を変えていった。

その熱は冷めることなく、今もトクン、トクンと私の胸を焦がしている。

マスターへの愛が溢れて、止まらない。

私はマスターの胸に強く顔を埋めその鼓動を聞く。

しかし熱は治まるところか燃え上がる。

嗚呼、マスタ―。

マスター、マスターましたーましたーましたーましたーましたー
すたーますたーますたーますたーますたーますたーますたー

！！

「ます、たー」

「……………ん？」

「っ！？（ビクッ）」

マスターがお目覚めになる。

私は今の状況に焦る。

私の顔が赤いのは自分でも自覚できるほどの熱から解る。

優しいマスターのことだ。きっと私が風邪などの病気になったのではとお思いになるだろう。

「…………おはよう、リーな」

寝ぼけ眼でにこやかに私へ朝の挨拶を送るマスター。

現在十三歳くらいの外見年齢を持つマスターの顔立ちは中性的で幼さが抜けきらない。

浮かべる笑顔からはこちらへ全幅の信頼を寄せていることが窺える。ああだめだ、体温が上昇する。

ここは心配させないようにとりあえず挨拶を返そう。

「お、おはようございましゅ、あう」

か、噛んでしまった、舌が痛い。

「ちょ、大丈夫か？」

うう、逆に心配をお掛けしてしまうとは。

……マスターは、本当にお優しい。

奉仕精霊である私を本当の家族のように心配して、それが本当に暖かくて、私は何て幸福なのだろう。

「しかしまあ、二人して寝坊しちゃったな」

苦笑を浮かべながらマスターは言う。

マスターも私も朝は早くに起き、どんな依頼があるのかを知るためにクライアントへ問い合わせをする。

割の良い仕事は早い者勝ちで取られてしまうので早く起きすぎるなんて事はない。

「今日は休みにしてどっか出掛けようか？」

マスターからのお誘い。

他の傭兵では手を焼く外道召喚師の討伐などを中心に依頼を受けているマスターは経済的に裕福であり、マスターからお誘いを受けた場合は高級レストランやなじみの武器屋などに行くことが多い。

その帰りには必ずと言って良い程プレゼントを与えられる。

その中には宝石や貴金属を中心にした装飾品が多く、マスターは更にそれを呪術的に加工し戦闘にも役立つ代物へと改造してくれる。改造の内容は結界や障壁などを一度限り展開する物が多く、私がどれだけ大事にされているのが解る。

「はい、マスター。ですが昨日までの疲れを完全に癒やす為に、今日は出かけず家で過ごしませんか？」

「うん、それも良いかな？　じゃあそうしよう」

「はい、良い休日になりました」

マスター、私は幸せです。

マスターも幸せですか？

もしそうなら、私はマスターよりも幸福です。

side out

「……こんな事で良いのか？」

「はい、マスター。とても安らぎます」

休日。

特に出かけるでもなくリーナと一緒に時間を使う。

出かけるのも良いがたまには家でゆっくりするのも良いかと思い、今は椅子に座る俺の膝の上に乗っているリーナをその背中からゆったりと抱き締めている状態である。

腕の中に確かにあるリーナの熱。

顔の真下にある髪の毛から漂う仄かな香り。

……確かに安らぐというか癒されるというか。

「ふふっ、ますたぁ」

スリスリと甘える猫の様に頬擦りするリーナを見ると、その、何だろう、胸からわき上がるこの感情は。

この場所こそ自分がいるべき場所とでもいうように、まるでマーキングでもするように頬擦りする。

こう、寝ている猫を撫で繰り返したくなるときの感覚に似てるんだろっ。

「よしよし、いい子だな」

猫っぽいので顎の下を撫でてみる。

「あつ、ますたーくすぐつたいです」

こそばゆいのか身をよじらせるが、いやがる様子はない。
気に入ったのならたまにやってみるか。

こうして休日の大半を使いリーナを猫可愛がりした。
また新しいリーナの可愛い一面が見れてとても充実した一日だった。

三話（後書き）

山なしオチなしな感じに仕上がった。

リーナの愛らしさとか表現したかったが、これはいったいどのくらいフェチだしな感じになった。

執筆前にエロ本なんて読むんじゃなかったよ、全く。

因みに、主人公のキャラは斎賀みつきさんボイスをイメージして作るうとしたが失敗したっぽい。いろいろ反省の多い三話でした。

四話（前書き）

難産。

時間かけた割にあまり上手く書けなかった。
後で修正するかもしれない。

四話

ダン、ダン、ダン
銃声、銃声、銃声

右腕の回路に魔力を回し、術式により破壊力を増した357マグナム弾を撃つ際の反動を軽減し精密な射撃を行う。

「帆が倒れるぞ！ 早く帆の下から逃げろ！！」

「ちよつと何あれ、反則じゃん！！」

弾丸は船のマストを挟み海賊の群へ倒れる。

「今日は厄日だなあ」と少年、城之崎 恭治は自分の外見年齢と同じくらいの少女を抱えながら小声で呟く。

こうなつたのは数時間前に受けた依頼が原因だった。

（数時間前）

「護衛だつて？」

「そう護衛。 マルティー二家の何とも過保護な以来さ。 内容はマルティー二家のご令嬢が今度入学する帝国軍の学校へ着くまでの護衛。 なお、護衛対象のご令嬢には元軍人の家庭教師が着いてい

るようだ。有効に使える」

いつも通りクライアントの所へ依頼を受けに行った恭治は帝国の豪商として名高きマルティー二家の依頼を受けることとなっていた。

「弾薬費は？」

「弾薬費を含めた経費は全てマルティー二家が持つらしい」

「大盤振る舞いだな」

大抵この手の以来は弾薬費の半分の負担等が関の山で、街や施設で
の場合は破損物への修繕費を自腹で出さないといけない場合も多く
あまり人気のない仕事である。

「これはマルティー二家と我が赤羊商会との繋がりを強くするまた
となない機会だ。そちらにとっても悪くない話だろう？」

確かに仕事の条件も報酬も悪くはない。

おまけにマルティー二家のお得意様になれたなら高報酬の依頼を優
先的に任せてもらえる可能性もでる。

「……確かに、悪い話ではない。良いだろう、引き受けてやるさ」

「期待してるぞ吸霊鬼、我が商会屈指の力を見せつけてやれ」

「精々期待しないで待ってる」

吸霊鬼。

それは依頼を受けている内に恭治が得た二つ名だった。

恭治の身体にある回路の現在確認されている効果は強化、侵食、接
続、吸収、放出である。

その内の吸収は回路の接続された対象から魔力を略奪する効果があ
り、実体を持たないシルターンの妖怪やサプレス縁の召喚獣を触れ
ただけで倒すことが出来、その様がまるでそれらの召喚獣を喰らっ

ているように見えることからその名が付けられた。

「リーナ、来てくれ」

赤羊商会の館から出た恭治は召喚術を使いリーナを呼ぶ。

「参上しました、マスター。依頼内容は？」

「とある名家のご令嬢の護衛。パイソンの他にも色々持つて行った方が良さそうだ、用意を頼む」

「了解しました。準備を整え待機します」

「任せたぞ」

「はい」

返事をするリーナは転移の術式を起動させ家へと移動する。

「さて、護衛対象はどんな奴だろうか」

空に目をやりながら恭治は呟く。

空では燦々と輝く太陽が地上を見下ろしていた。

……依頼を撤回したくなったのはこれで何回目か。
恭治は心の中で呟く。

「ちょっと貴方！ 聞いているの!？」

「はい、聞こえておりますのでわざわざ怒鳴らないでください」

「怒鳴ってなんかいないわよ!!」

「あ、あの、ベルフラウちゃん？ もう少し静かに……」

リーナへと怒鳴り声を上げる護衛対象。

それを流すリーナ。

その様子を見てあわあわとしている家庭教師。

……何さ、この状況。

恭治はにじみ出るように発生した頭痛に目眩を起こす。

この混沌として状態はまず恭治とリーナが護衛対象と家庭教師に合流したところから始まった。

「貴方が私の護衛として選ばれた吸霊鬼ね？ お父様から貴方が活躍したお話は聞いているわ。何でも射撃の名手なんですってね!」

取り敢えず自己紹介を始めようと思った恭治の出鼻を今回の護衛依頼の対象であるベルフラウが挫く。

何でもベルフラウは父親から恭治の話を聞いて彼に多大な興味を持ったらしい。

曰わく「射撃の名手にして霊界サプレスの召喚術を多用する有能な召喚師。冷酷な狩人にして勇猛なる戦士」等々。
随分と過大評価されている節も見あたるがそれらの評価は概ね当たっていた。

こと戦闘においての技術及び知識は数年に渡るリーナの教導お蔭か戦闘のエキスパートと呼んでも過言でないほど恭治の血肉となり身に付いていた。

ベルフラウは射撃と召喚術に対して関心があるのかそれ関係の話題を興奮気味に恭治へ話しかけてくる。

「マスターが迷惑がられています。お控えください」

そこへ恭治のその様子が迷惑がっているように見えたのかリーナが口を挟む。

その言葉を聞いたとき、恭治は終わったと思った。

護衛対象にこのような態度をしたと商会や依頼主に知られれば自分への依頼が回ってこなくなる可能性や、様々な妨害を受けることも出てくるだろう。

……リーナさん自重。想いが重いというか、嬉しいのだが仕事の際は控えてくれというか。

心の中で溜息をつく恭治。

きつい言葉を放つベルフラウ嬢とそれに取り合わないリーナ。

一方家庭教師はというと、

「初めまして、アティと申します。一緒に頑張りましょうね?」

「頑張るのは良いがああ喧嘩を止めるのを先にしないか?」

「えっ、はわ!??」

天然さんだった。

この混沌とした場に早くも疲労を感じる恭治だった。

船室に入り互いに自己紹介を終えた四人は再びカオス空間を展開していたが、

ズドン

破壊音

その砲弾は衝撃を伴い四人を日常から闘争へと駆り立てた。

「何ですの!？」

「音から察するにこれは大砲だな。海上で大砲と言えば一つしかないだろう?」

「……海賊、ですね?」

海賊の到来にいよいよ来たなと渋い顔をする恭治は装備の確認を始める。

武器。

スローイングナイフ×15本。

コルトパイソン×一丁。

弾薬。

357マグナム弾×24発。

術式加工済357マグナム弾×6発。

医療品。

救急セット×1。

食糧。

軍用レーション×2。備考、とても不味い。

その装備は自由に戦闘するには些か足りないと感じのするものだった。

「……しょうがないか？ まあいいさ。リーナ」

「はい」「家に転移して物資を用意してくれ。場合によっては長期戦になるかもしれない」

海賊達の統率力が高ければ高い程遠距離戦かつ奇襲による一対一を基本的戦闘スタイルとする恭治にとって装備が心許なく且つ自分とパートナー、元軍人とお嬢様という多勢に無勢な今のパーティーでは余りにも危険が多すぎる。

故にタイミングを見て物資を補給することが必要になる。

リーナの行う転移とは自分が定めた場に楔を打ち、その場へ自分のみが通れる直通の道を作るというものであり物資を即座に用意するのに便利だった。

弾薬などが届くまでは防戦に徹するか迅速に撤退するかで迷うが、何れにせよ弾丸が欲しい状況だと考える。恭治が悪魔形態（仮名）になれば召喚術が相手の手中に無い限り殲滅することも可能だが、人前でその姿を晒すのは賢くないと方針に長期防衛と即時撤退を入れた。

「どうします？」

アティが恭治へ意見を求める。

流石と言っべきか、元軍人は瞬時に思考経路を切り替え対応法を模索し始めている。

その表情に先程までの天然さはなく、ただ冷静に眼が現状を見つめていた。

「籠城か脱出かと考えた。どちらにしる弾薬が少ないから俺は満足に戦えない」

「近接戦は？」

「やるにはやるがそれも奇襲や一对一の時しかやらない」

「なら、こうしましょう」

アティは作戦を提案する。

その作戦に恭治は苦笑いを浮かべた。

アティは気合いの入った表情で腰に付けているロッドを抜いた。

甲板。

海賊達は手慣れた動きで船にいた軍人達を圧倒し、順調にその歩を進めていく。

そこに、

「召喚、シャインセイバー！」

まるで挑戦状を叩きつけるが如く、海賊達の眼前に剣達を召喚した。その姿は正に指揮官だった。

「……本当に大丈夫なんですか？」

階段の影、アティが戦闘に加わっている陰でベルフラウは恭治に問

う。

アティ自らが陽動を行い、その隙にベルフラウ達を安全な場所へと避難させ、その後自分も撤退するという作戦を立てた。

恭治はそれに従い、物陰から様子を窺っている。

「心配はするな。元々俺はあんたの護衛だしあいつも教え子のためにと戦っている。今時いないぞ、あそこまでまっすぐな眼をする奴は」

軽口を叩くように恭治は語る。

「あんたはどつしりと構えている。そうすりゃ俺たちが必ずあんたを守り抜く」

不安が少しでもなくなるようにと笑みを浮かべながら恭治。
その笑顔にベルフラウは

「……ふ、ふんっ、当然よ」

赤面した。

恭治は戦場をただ感じる。

感覚器官を強化し隙を探す。

と、アティが召喚術を放とうとして、場の注意がそちらに反れる。
よし、とベルフラウを抱え踏みだそうとした瞬間、

「！、そこっ！」

タン、タン
発砲、発砲

恭治は慌てて物陰に戻る。

銃弾は精密に放たれ、一歩間違えば恭治の顔に直撃していただろう。

「どうしたソノラ！」

「兄貴、あの影に何かいる！」

「（マズツタ！）」

焦燥感。

存在が感知されたことに焦りが生まれるが、ベルフラウの不安そうな顔を見て何とか冷静さを取り戻す。

「（ちょっと嫌な手だが、しょうがないか。この際誇りとかはドブにでも捨てちまおう）ベルフラウ嬢」

「な、何よ？」

「おびえた振りして喋らずに着いてきてくれ」

卑怯にして博打のような手。

後に恭治はこの手をそのように語る。

それ程までに恭治はこの手が嫌いだった。

「隠れてないで出て来なさいっ！」

鋭く大きな声。

大の大人でも萎縮してしまいそうな声に従ったかのように恭治は姿を現す。

「う、撃たないで下さい！」

「……え？」

銃使いの少女は驚く。

この状況でこの場に残っている人種は自分達海賊と船を守る軍人、そして乱入してくる強者くらいだと考えていたからだ。故に驚愕。

「子供?!」

出て来たのは二人の子供だったのだから。

恭治の外見年齢はベルフラウより少し上くらいなものであり、恭治はそれを利用し怯えた子供を演じて窮地を脱しようとしたのだ。

「あー…」

銃使いの少女、ソノラはばつの悪い顔をする。

いくら海賊といえど怯えた子供にまで攻撃するほど落ちぶれてはいない。

更にソノラ達は情に厚いタイプの海賊であり、略奪こそするが基本的に女子供には手を出さない主義だ。

「兄貴い、この子ども達どうするー?」

振り向き後ろにいる兄へと意見を求める。

「- 故に、

「ああ? つ! ソノラつ、危ねえ!!」

「その通りだ銃使い>>ガンスリンガー<<」

「- 恭治はそこに付け込んだ。」

ダン、ダン、ダン
銃声、銃声、銃声

「っ!？」

先程の子供が発したであろう声に危険を感じ横に飛び、空中で体制を変え銃を構えようとする。

この一連の動作は素早く、見る者全員がソノラを一流の銃使いと呼ぶだろう。

だが恭治の放つ弾丸は正確にソノラの銃を捉え、それを弾く。

最初の一発は銃のリボルバー部分に命中し、銃はソノラの手から宙へと躍り出る。

次の一発は宙を舞う銃を更に上空へと跳ね上げる。

そして最後の一発が再び銃リボルバー部分に当たりそれを海へと弾き飛ばす。

人間業じゃない。

ソノラは転がりながらその一連の流れに驚愕すると同時に、背筋に冷や汗を掻いた。

馬鹿みたいに精密な射撃、それを成し遂げる腕力、技術、そして演技。

ソノラの見た少年の顔は先ほどの怯えは見えず、ただ餓えた獣のようにギラギラとした眼が笑みを浮かべていた。

「ソノラ、下がれっ！」

「分かった、ゴメン！」兄弟共に互いに一言。

ソノラは銃の使えない自分の状況を見て下がる。

「銃使い制圧完了」

恭治はリボルバーから残弾三発を抜いて腰の弾丸入れにしまい、懷から新しく三発の禍々しい輝きを放つ弾丸を取り出し装填する。

「さて、つまらなくなつて来やがつた」

銃口を海賊の群へ向ける。

海賊達の視線を恭治が独占する。

「デメエ、よくもやつてくれたな」

「自業自得だろう？ それとも卑怯と罵るか、略奪者共」
「ちっ」

海賊の頭は顔を歪める。

先の残弾を取り出す姿を見ればソノラが見逃されたことが解る。

そして略奪者と言つ言葉。

女子供には手を出さない。それは立派な事にも見え聞こえも良いが、結局のところ後の世に憎しみを残すだけである。

海賊の頭、カイルは自分が未熟だった頃の課題を繰り返される。

そう、未熟だった頃の課題。

「へっ、その通り俺達はどうしようもない野郎の集まりだ。だがなあ」

だが、

「それでも俺達は、縛られるのが嫌いなんだよ！」

若い海賊とその仲間達は自由を求めた。

蒼い空を自由に飛ぶ海鳥のように。
青い海を優雅に泳ぐ魚達のように。

その言葉を聞き恭治も一言、爽やかな笑顔でこう言った。

「いや聞いてないし、知らなえよアホ」

正に一蹴。

そのあんまりな反応に海賊達もざわつき始める。

カイルは一瞬ぽかんとしたが直ぐにバカにされたことに気付く。

「て、テメエっ」

「ふっ」

恭治の冷笑にカイルは切れる、ブチッと。

「野郎共オ！ そのスかしたガキをぶっ潰しやガレエ！！」

怒り混じりの号令は海賊達へ広がり、数秒と経たない内に軍団は突撃を開始する。

対して恭治。

「ベルフラウ嬢、ちよっと我慢な？」

「へっ？ あ、ちょ、ちよっと！？」

ベルフラウを小脇に抱え跳躍の体制をとる。

「……起動」

小さな呟きの後、恭治の腕にある回路を伝いパイソンに魔力が流れる。

パイソンは黒色のその銃身に青白い光を纏う。海賊達が近付く。

タイミングを見計らう。

「強度固定、並行起動、脚部回路放出準備」

脚を流れる魔力が圧縮される。

海賊達は目前。

「……開放」

バン

跳躍

強すぎる跳躍により木製の床が鳴く。

開放された魔力は恭治の身体に上方への大きな推進力を与える。

啞然。

海賊達は自分達の目を疑う。

自分達の頭上を飛び越える小さな陰。

常識では考えられない現象。

人の限界に喧嘩を売る挙動。

それが海賊達から判断力を失わせた。
恭治は更にその隙を突く。

「術式起動、魔弾>>スperlバレット<<、大気の悲鳴>>バース
ト・エア<<」
ダン、ダン、ダン
銃声、銃声、銃声

右腕の回路に魔力を回し、術式により破壊力を増した357マグナム弾を撃つ際の反動を軽減し精密な射撃を行う。

「帆が倒れるぞ！ 早く帆の下から逃げろ！！」
「ちよつと何あれ、反則じゃん！！」

三発の魔弾は船のマストを挟み海賊の群へ倒れる。

海賊達は隊列を乱し散り散りになる。

「（よし、今だっ）シャインセイバー！」

海賊達へアテイの召喚術が降り注ぐ。

偶然の産物だが陽動と奇襲が綺麗に入れ替わり海賊達は動ける数を
どんどん減らしていく。

トサ
着地

甲板に再び足を着けた恭治は辺りを見回す。
恭治達が戦っていた海賊達はほぼ全滅していた。

「予定と違うが結果オーライか？ …… っと悪かったな、今降ろす」

恭治は脇に抱えていたベルフラウを降ろす。

ベルフラウはパンパンと皺を伸ばすように服を叩く。

その表情はとても不愉快そうだった。

「…… 無茶苦茶だわ、こんな。それに、怖かった」

「そりやすまない。だが貴重な体験ができたろう？」

そう言った恭治は五秒後、ベルフラウに頭を叩かれた。

五話（前書き）

強いスカーレルを書きたかった。

本文にオカマどうのこうのとあるが作者は結構スカーレルが好きです。

それにしてもサモンナイトは元の戦闘があれだから色々書きずらいと感じた。

五話

「さて、これで何もないなら良いのだが……」

恭治は呟きながら空薬莢三発を取り除き、腰の弾丸用ポーチから新しく六発の弾丸を取り出し銃へ装填する。

「まだ何かあるの？」

「ああ、具体的には」

銃口を物影へと向ける。

「そこに隠れてる血生臭い奴とかだな」

銃を構えて言う恭治の言葉に警戒の色が混じる。

血生臭い。

傭兵をやると必ずと言って良いほど遭遇する血の匂いの染み着いた奴ら。

それは在り方の狂った殺人鬼であったり、ある時は復讐に思いを馳せる外道召喚師だったり、またある時は戦いに疲れたはぐれ召喚獣であったり。

そして今回の敵はその中でも飛び抜けて血生臭く、間違いなく玄人だろうという予感めいた危機感が恭治の戦闘思考を加速させる。

「おいおい、このまま喋ったら頭の悪い奴に見えるからとっと出て来いよ」

……嫌な感じだ。油断をすれば直ぐにでも首に喰らい付いてきそうな重圧感。そして蛇が絡み付くかのような気色の悪い殺気。殺し屋それも恐らく凄腕の。ならどうするか……。

恭治は敵の正体を予測し戦闘の手順を決めていく。

「解ったわよ、出て行くからいきなりズドンは無しよ？」

物影からの声。

男の声で女口調。

なんかそんな奴居たな、と考えながらも銃の照準は外さない。

「初めまして、カイル一家の御意見番ことスカーレルよ」

出てきたのはオカマだった。

ダン

銃声

無意識の下で指に力が入り思わず発砲。

だがオカマは、スカーレルはそれを回避した。

「……いきなりは無しって言ったのに」

「俺は了承してないし何より気持ち悪い」

冷や汗を流すスカーレルに冷徹な言葉を浴びせる。

それを聞きスカーレルは口元をひくひくと痙攣させる。

どうやら恭治はスカーレルに精神的ダメージを与えたようだ。

「ず、随分と言ってくれるじゃない？ 坊や。大人を嘗めて掛かる

と痛い目を見るわよ？」

しかしそこはスカーレル、子供の戯言と思い怒りを静め大人の貫禄を見せる。

「戯け、貴様の存在が目には痛いわ」

しかしそれは十秒と持たず砂上の楼閣の如く崩れ去った、恭治の放つ侮蔑と呆れの混じった一言によって。

「コオオゾオオオオオオオオオ！！」

般若の顔。

そう言われて納得しそうなほど怒りに表情を歪めたスカーレルは甲板を風の如く疾走する。

……速い！

藪から出た蛇の余りの速さに心中で感嘆の声を上げる恭治。

「碎ッ！！」

ダン、ダン

銃声、銃声

スカーレルの頭部と胸部へ放たれる弾丸。
しかしそれはスカーレルを捕らえない。
スカーレルは地面スレスレまでに体制を低くし疾走することで弾丸を回避しつつ更に加速する。

「チイツ!？」

一閃。

恭治の懷に潜り込むや否や、スカーレルは素早く短刀を横から振り抜く。

白銀の軌跡を残し振るわれる短刀を後ろ飛びに回避する恭治。

「シャアッ!!」

一閃、一閃、一閃。

確実に身体の急所を狙う攻撃は手数に任せた連撃ではなく一振り一振りが狙い澄まされている。

「こ、のおっ!」

一閃、共に前への跳躍。

スカーレルの放つ低めの一振りを見計らい跳び、背後に着地するや否や再び前へ転げるように跳ぶ。

一閃。

その背後をスカーレルが振り向きざまに振った一閃が捕らえようとすることも当たらず。

両者は仕切り直しの姿勢となる。

「怒りは演技かよ?」

「演技じゃないわ、怒っても冷静に動いただけよ」

恭治は銃口をスカーレルに向け苦々しい表情で問い、スカーレルはそれに対し自然体に構え涼しい表情で返答する。

恭治はスカーレルと自身との間にある経験の差を自覚した。

「（……リロードは出来ないし射撃も効かない）」

「次、行くわよ？」

「！」

突撃。

スカーレルの地を這うように疾走する様に恭治は蛇を幻視する。

ダン、ダン、ダン

銃声、銃声、銃声

三発の銃弾を行動予測しながら放つも一発目と二発目はステップで回避され、三発目は弾丸の軌道に短刀を合わせられて弾かれる。それに対し恭治は、

「（まあ、）」

あろうことが撃ち終えた銃を、

「（なんとか、）」

大きく振りかぶり、

「するけど、さっ――！」

投擲した。

「っ――！」

驚愕しながらもスカーレルは投げられた銃を弾いた。

だがスカーレルが真に驚いたのは投擲物の威力と速さだった。

短刀で受けた衝撃が流しきれず腕がしびれる。

如程の威力が籠もっていたかと考えたその時、スカーレルはそれを見た。

バン

跳躍

地面と平行に跳躍し弾丸のようなスピードで接敵し一気に懐へ。

「シッ！」

一閃。

その驚くべき速度すら計算に入れた迎撃の一振りは恭治の首もとへ銀の軌跡を描こうとし、

キーン

拒絶音

恭治の腕に阻まれた。

「バカなッ！？」

腕に接触した短刀は肉を断つどころか皮膚すら切れていなかった。

「呆けてんじゃねえよ！」

一閃。

恭治は懐から出したスローイングナイフでスカーレルの短刀を持つ

方の肩を斬りつける。

「つくう」

スカーレルは後ろへ跳び何とか深手を避けるが着地の瞬間に体制を崩しそのまま動かなくなる。

「コレは、毒、ね」

「正解、即効性のある神経系の毒だ。一時間もすれば動けるようにはなる。が……」

「があっ!？」

恭治はスカーレルの腕を踏みつけ短刀を落とさせる。
そして短刀を遠くへと蹴り飛ばす。

「あんたの動きは無駄なく合理的に人を殺害する殺し屋のそれだった。毒に耐性を付けてるかもしれないから悪いが牙を抜かせてもらった」

「……賢明ね」

腕を踏まれた痛みで顔をしかめながらスカーレルは評価を口にする。
さあどうしてやるのかと思案しようとしたその時、天候が急激に悪化した。

「なんだ、こりゃ。海って言うのはこうも急に荒れるものか？」

「いえ、私はこんな海は見たことがないわ。何かがおかしい」

「キョウジさん!」

突如その表情を変えた海原に考えているとき、アティが恭治の下へ走り寄る。

「どうした？」

「はい、このままでは船が沈むかもしれません！」

「そりゃ、不味いな」

強風と荒い波、暗い空などの要因がその光景を想起させる。船が沈めば護衛どころではなくなる。

取り敢えず護衛対象のところへとベルフラウの方を見れば、

「キヤアアアアッ!!」

物理法則に従い海へ絶賛落下中だった。

「ベルフラウちゃん！」

「あ、おいっ！」

ベルフラウが落ちたと見るとアティは後を追いつら海へ飛び込んだ。

「無茶なことするわね、貴方のお仲間も」

「本当にな」

「……行くの？」

「まあな、依頼だし」

「そつ、健闘を祈るわ？」

「勝手に祈ってろ」

スカーレルと少ない言葉を交わし恭治も海へ飛び込んだ。

「……………で、私はどうすれば良いのかしら？ 船が傾いて、あ、

滑る。ちょ、ちょっと待って私は今動けな、ああもう、誰か助けてええ！」

後には徐々に海へ落ちる恐怖を味わうスカーレルが残された。

｝ another side ｝

「う、くうっ！」

身体の節々が上げる悲鳴で目を覚ます。

辺りを見て浜辺に流れ着いたことを思い出す。

船から投げ出された私は二人に助けられた。

荒れ狂う海でまず私が溺れないように掴み上げてくれた私の家庭教師。

しかし彼女の腕に抱えられて海を漂う内に、彼女は流れてきた巨大な木材（恐らくは船の残骸だろう）から私を守り、それに後頭部を直撃され気を失う。

絶望と少しの嬉しさ。

こんな私を身を挺して守ってくれて嬉しかった気持ちと、死に対する絶望感。そして、私のせいで死んでしまうことへの罪悪感。

そんな風に何も出来なくなった私を救ってくれたのは彼だった。

「絶望するくらいならその境遇に怒りを向けな、お嬢」

彼は沈もうとしていた先生を掴み上げ、もう片方の手で私を抱き寄せ優しく怒った。

その時の彼の姿は人の物ではなかった。内緒にしてくれと悪戯っぽく笑う彼に私はただ小さく頷くばかりだった。

気の利いた言葉を掛けたかったが出来ず、むしろ彼の方が私の気を紛らわせようと自分の体験談や失敗談を語ってくれた。

心が温かかった。

彼の優しさで私は正気を失わずにすみ、そして私達は島へと流れ着いた。

「すう、すう」

彼は私の隣で安らかな寝顔を浮かべている。

その顔を見ると船で海賊たちを相手に大立ち回りをした人と同一人物とは思えず、クスリと笑ってしまった。

……強くて優しい私より少し上くらいの男の子。顔は中性的で綺麗な黒い髪。

もし私に兄がいたならこんな人なのではないだろうか。

「……お兄、さま」

……あ、ダメだ、恥ずかしい。

顔が灼熱してる。

熱い。

そして恥ずかしい。

でも、何かほかほかする。

そんなこんなで、疲れの抜けきらない私は彼に身を寄せて二度寝した。

彼は、とても温かった。

五話（後書き）

最後のあれはベル様にお兄様と呼ばせたかっただけだったりする。
島に着いたらアティ先生の出番を増やして上げたい。
と思った第五話でした。

六話

海。

生命の源。

人間が暮らすことを赦さぬ砂漠に続く自然領域>>デッドエリア<<。

そんな領域に闘いを挑む者が此処に一人。

彼女は潮風にその赤い髪を優雅に靡かせ、得物一つで様々な強敵>>フレンド<<と闘争を繰り広げる。

人々はその後ろ姿に憧れ彼女をこう呼ぶ。

ロードアングラー、と。

「何よそれ」

「今の状況を整理し物語の冒頭っぽく語ってみただけだよ、お嬢さん」

「……ベルで良いわよ、助けて貰った御礼にそう呼んでも構わないわ」

「そうかい、それならこれからは気軽に呼ばせてもらおうよベル嬢」

「……………（イライラ）」

現在俺達は釣りをしている。

もっと細かく言うなら集中力を高めすぎて無表情と化したアティが釣竿を威圧感バリバリで構え俺達はそれに若干気圧されながら釣竿を海へ垂らしている。

ベル嬢は俺との話が終わると俺の後ろで控えるリーナにガンを飛ばしていた。

理由は解らないがベル嬢はリーナが気に入らないらしい。

リーナもそれが解るのか態度が棘棘しいし、何より俺がベル嬢と会話をする度にイライラしている。

やはり海賊との戦闘の時に呼び出すのを忘れたからだろうか？

そんな事を考え始める。

数時間前、島での行動方針について話し合いをしているときにふとリーナがいないことを思い出した俺は慌てて召喚した。

「……召喚に応じ参上しました、マスター」

無表情。

最早無色と言っても良いほどにその顔は感情の色を映していない。これはリーナが深く考え事をするときの癖であり、恐らくいつまで経っても召喚を行わない俺を心配していたのだろう。

……駄目な主だな、俺は。

「悪いな、心配を掛けた」

謝罪の意味も込めて一言口にする。

「心配などしておりません、マスターの力は私が誰よりも把握して

おります。そのマスターが海賊などという無法者の集まりに負けるなどミョージンの卵からテテが生まれるくらいに有り得ません。だいたい……」

例えるならマシンガンのような弾丸トーク。

これだけの感情を自分に対して思っていてくれたと知った途端胸が熱くなるのを感じた。

「……………ただ」

弾丸トークが止み、それまでは見えなかった感情の色が表情に現れる。

「…………マスターがそばに居ないと、マスターのそばに居ないと、私は寂しくてたまりません」

寂しかった。

まるで子供のように言い放つ言葉であったが、彼女の感情を表すにはそれで充分なのだろう。

「おいで、リーナ」

「…………はい」

両手を広げてリーナにそう言った。

リーナは吸い寄せられるようにその中へ収まる。

「まったく、寂しがりやなんだから」

「マスターがいけないのです。私を一人にするから」

「そうだな、ごめん」

「解れば、いいです」

リーナは腕の中で安心しきった表情をする。

……そういやリーナもまだ子供だっけな。

俺は暫くリーナの頭を撫でた。

「……………で？ 何時までイチャついてるつもりかしら？」

「貴女には全く関係ありません、少し黙ってください」

私、不愉快ですと言わんばかりのベル嬢の一言に即座に返答するリーナ。

確かに傍目から見ると俺とリーナはイチャついてるようにしか見えないだろう。

俺だって目の前でカップルにイチャつかれたらイラつくだろうし。

リーナはリーナでベル嬢への返答がマイナス域で、見てるこっちの背中が底冷えするほどだ。

その後数十分に渡り舌戦が繰り広げられる。

「キョウジさん、お腹空きませんか？」

それまで二人の舌戦を止めようと奮戦していたアティが唐突に話しかけてきた。

「そっぴいや何も喰ってないな、腹も空くか」

「え、いや、私は別に空腹とかそんなんじゃないことでしたわよ？」

「声が裏返ってるし口調が変だ。しかし食い物なんて無いぞ？」

「あるじゃないですか」

アティは必死で自分の空腹を隠していた態度とは打って変わり、海へ手を広げ言い放つその様はまるで民衆を先導する政治家のように見えて、

「あの広大に広がる海の中に」

その様はロマンを語る子供のようにも見えた。

数分もしない内に釣竿を人数分作り上げたアティはそのまま魂が別の世界へ旅立ったかのように表情を変え釣りへと没頭していた。

「凄い集中力です」

「ホントにな」

「ちよつと怖いわ、無表情で」

「臆病者ですね」

「何ですって!？」

「ウルサイと魚が逃げるから黙って下さい」

その圧迫感にベル嬢とリーナもおいそれと喧嘩を出来なくなっていた。

……この人、本当は恐怖政治とかに向いてんじゃない？ 何て思う今日この頃であつた。

クイツ

反応

「お？」

竿に反応があり当たりかと思い竿を引く。

それは黒色の身体を持ち、光と雫を撒き散らしながら後ろの岩に当たり甲高い音を上げた。

「何故にパイソン？」

それは船での戦闘以来行方不明となり、海のどこかをさまよっているだろうと思っていた愛銃だった。

昼時。

焼いた魚をみんなで仲良く頬張る。

魚は海水に含まれる塩分のみがスパイスだが、シンプルで粹な味わいである。

「……………美味しい」

「だろうな。空腹は最大の調味料とも言っし、何よりベル嬢にとって単純な味付けは新鮮だろう？」

「そうじゃなくてっ」

「ん？」

ベル嬢ははむはむと焼き魚の腹をかじりながら照れくさそうに言う。

「こんな人数でご飯を食べるの初めてで、何か、良いなあって思ったら美味しく感じて……」

ベル嬢は顔を赤くして俯いてしまう。

遭難して他者の温かさを感じるとは、何とも皮肉が効いた話だ。

「そうか、なら腹いっぱい食っとけ。」

「遠慮は要りません、沢山釣ったからドンドン食べてくださいね？」

「そ、そんなに食べたなら太っちゃうじゃない！」

ベル嬢を元氣付けるように明るく言うアティ。

それを聞いて年相応な悩みを口にし軽く怒るベル嬢。

和やかな食事風景だ。

「……紅の豚」

「な、ななな、なんですつてえ！！？」

瞬間、食事風景は崩れ去りキリングフィールドが形成された。

……リーナさんマジ自重。

本当にこの二人は犬と猿というか龍と虎というか、とにかく仲が悪い。

「ど、どうしましょう？　この場合喧嘩をさせた方が仲良くなるかもしれませんけど、でも怪我なんかしたら大変ですしどうしましょうキョウジさん！」

アティ先生平常運転。

テンパリ具合が半端ない。

「……ま、こんな生活も悪くはないか」

ふと空を見上げると、空はム力つくほどに蒼く広がった。

「……………」

これから、どうなるのだろうか。

サモンナイト3の知識などもう掠れてしまっている。

島に付いたからには何か厄介事に巻き込まれるだろう。

「……不安になっているのか？ らしくもない」

本当にらしくない。

何が起ころうが依頼を果たす。

それがリインバウムで見つけた俺の生き方だ。

「それで、良いじゃないか」

蒼い空の下、仲間達の喧騒に包まれながら俺は俺の方針を少しずつ固定していった。

六話（後書き）

文章が可笑しい。

アティ先生のキャラが可笑しい。

この作品でのアティ先生は釣竿を持つと性格が変わります。

七話（前書き）

最近大学のガイダンスとか履修登録とかで忙しく、体調も崩れやすくなっており、更新の速度が遅くなりそうです。

七話

俺は昼飯を食べ終わると武器の整備を始めた。

パイソンは海水に浸かり錆びてるかと思いきや傷一つすら付いていない。

そういえば一年くらい前に銃の材質を魔力で加工した金属に替えて作り直し魔力を伴ったダメージ以外では干渉を受けないようにしたんだっけ。

いや助かった。

錆びてたら色々とヤバかったぞこれ。

「マスター、先日の物資の件ですがどのようにいたしましたでしょうか」

パイソンを磨いているとリーナが話しかけてくる。
物資。

船での戦闘の際に長期戦の可能性を視野に入れリーナに弾薬などを補給するよう頼んだのだ。

「ああ、取り敢えず出してくれ」

「畏まりました」

そう言うときリーナはついと長いスカートを両手で持ち上げる。

露出した足は黒いストッキングに包まれこちらの目を誘惑する。

と、スカートの中が淡く発光し、かと思えばそこからポロポロと弾薬やナイフ、果ては刀まで転げ落ちてきた。

「……俺以外の男が居るときにやるなよ、それ」

「了解いたしました、ますたー」

嬉しげな笑顔で返すリーナ。

まったく、俺の相棒は何でこっぴどい可愛らしいのだろうか。
大量に出てくる物質の中に交ざっていた刀を手にする。

「刀は、群裂>>ムラサキ<<か」

「はい、製造した五本の中で最も力の強い群裂を選びました」

妖刀群裂。

それは俺がシルターンで鍛冶師をやっていたはぐれと共同で制作した五本の刀の内の一振りである。

群裂の名前の由来は大群を全て切り裂いたとしても折れず、切れ味を失わないという製造目的からだ。

刀の材質を精製する際に魔力で加工、加工して出来た魔鋼で刀を打ち据えた後所有者の魔力を喰らい切れ味と硬度を強化する術式を幾重にも刻む。

その結果、並みの使い手では刀に魔力だけでなく生命力すら喰われてしまう妖刀に仕上がってしまったのだ。

そして鍛冶師は「また頂に近付いた」と謎の言葉を残し去っていった。

補給した弾薬などは一ヶ月ぶっ続けて戦闘を行っても充分な量があ

りそれをアティとベル嬢に話し、周辺の探索をする事にした。
浜辺には漂流した武器や雑貨などが結構流れ着いていた。
調理器具や調味料なども流れ着いていたのでこれからは味の濃い料理を食べたりすることも可能だろう。

で、今の状況だが、

「ギユオオオオオツ！」

不定形生物の群に囲まれていたりする。

スライム達是不思議な叫び声を上げながらうねうねしている。

「き、気持ち悪い」

「確かに、これは来ますね……」

「そんなもんか？」

「マスターは平気でも他人には許容できない事柄なのです」

「それはお前もか？」

「はい」

女性は総じてこの不定形生物が苦手らしい。

……それにしても、スライムとは喰えるのだろうか？
喰えるとしたら何味なのだろうか？

「……喰うか？」

「ハアッ！？」

「エエッ！？」

「………はぁ（額に手を当て溜め息）」

反応が悪い。

あれ等が食卓に並ぶのは嫌なようだ。
ならしょうがない、誰もいないときにこっそり食べるとしよう。

「冗談だ。それより戦う為の準備は出来たか？」

ジト目でこちらを見ながらもみんなは戦闘に備えていく。
と、そこで問題が発生する。

「……ない」

「何がないのよ？」

「召喚石がないんです！」

アテイの召喚石は軒並み海に沈んでしまっていた。

漂流物の中から杖こそ手に入れたものの、召喚師にとって召喚獣が
呼べないことは戦闘に参加できないも同義である。

「召喚術無しでどれくらいいける？」

「身を守る程度には」

「他人は？」

「……難しいです」

「解った。リーナは近接戦を頼む、こちらは射撃で援護する。……
こちらに近づけるなよ？」

「了解。群裂を使用します」

そついうとリーナは群裂を抜きスライムの群へ駆けていく。

「ちょ、ちょっと！」

「大丈夫なんですか？」

ベル嬢とアティが戸惑いの声を漏らす。

リーナの姿を見ればその不安も当然だろう。
だが召喚獣という生き物は見た目に左右されないものだ（ミニエツトとか）。

「安心しろ、リーナは俺よりも強い」

三閃。

袈裟斬りから斬り上げ、斬り上げた刀の勢いを利用し反転後ろへの横斬り。

リーナは三匹のスライムを撫で斬りにする。

「……綺麗」

「……速い、ですね」

二人はその無駄のない動きに感嘆の声を漏らす。

リーナは次々とスライムを斬っていき、俺はリーナが囲まれないように射撃で援護する。

その内にスライム達は姿を消していき、やがて生きているスライムはいなくなった。

さて、今俺達はアティの戦闘での動きについて話し合っている。

「やはりサモナイト石を探して誓約するのが速いよな」

「そうですね。でも土地勘もないのに無闇に動くわけにはいきませんよ?」

「別行動するにも護衛の依頼があるしな」

召喚術が使えるか使えないかは戦闘においてとても重要な要素だ。一対一なら二対一に状況を持っていけるし、召喚獣の力は人間を凌駕する。

「マスターが召喚すれば良いのでは?」

リーナが提案する。

しかし、誓約済みの召喚石は持ってきていない。

「こんな事も有ろうかと一つ持ってきました」

といってリーナは胸元から鬼妖界の召喚石を出す。

「でかしたリーナ、後で我が儘を一つ聞いてやる!」

「感謝の極み」

などと言いながらリーナは想像の世界へ旅立っていった。

途中、顔が瞬間沸騰する様が見れて面白かった。

「じゃあ呼ぶか。……鬼妖界の盟友よ、酒飲み仲間よ、今一度我が依頼を聞きたまえ! 召、喚っ!」

異界へ通じる門が開かれ、それは現れる。

白い貌。

白銀の体毛に、九つもある尻尾。

白面白毛の九尾の狐。

それが圧倒的な威圧感を持ち、こちらを眺める。

「久しいな、雪野」

「……………」

「そうか、引き受けてくれるか」

「……………」

「ん？ 報酬は尾の手入れ？ 良いぞ、お前の毛はモフモフして触る方も幸せになれる」

「……………（照れ）」

「ハハッ、初奴よのう？」

わしゃわしゃと狐、雪野の頭や顎をムツゴロウさんバリに撫でくり回す。

雪野は「くきゅうん」と切なそうな鳴き声を上げた。

「コイツが護衛をしてくれるぞ？」

「尾が九本？ ……九尾の狐じゃないですか！」

アティが素っ頓狂な声を上げる。

「知っているの？」

「ええ、獣の妖怪にとってその尾の数は多ければ多いほど膨大な力と知識を得た証拠で、九本の尻尾を持つ狐には一匹で国を焼き尽くしたという伝承が有る程です」

「……………（啞然）」

疑問に思い聞くとその規格外の強さに啞然とするベル嬢。
まあ、あれはコイツの娘にちよっかいを掛けたあの国主が悪いのだ
がそれはまた別の話か。

「……アナタは」

「どうした？」

「アナタは何者ですか？」

それは本能的恐怖からくる疑問だった。
国滅の獣を従えるだけの力を持つヒト。
それは果たして人間と呼べるのか。
規格外を上回る規格外の味方。
味方としての輪郭がぼやけて疑念が生じる。
その力が自分達に向くのでは、と。

「答えてくださいっ、アナタは」

「先生っ！？」

異常。

アティから指向性を持った魔力の放出を確認する。
指向性の向く先は俺。

種類は警戒と威嚇。

異常である。

何故、リンバウムの人間であるアティに魔力単体の操作が出来る
のか。

リンバウムの人間は魔力を使うことに身体が耐えられない。
たとえ耐えたとしても身体はスタボロになり魔力を受け付けない身
体となる。

その為操作の術も開拓されていない、手綱の無い暴れ馬なのだ。

故にサモナイト石を媒介にして異界より召喚獣を呼びその力を借りる。

サモナイト石は異界の扉を開く鍵であると同時に、術者の身体に余分な魔力が流れるのを防ぐストッパーでもあるのだ。

それがどうだ？

今アティの周りを渦巻く魔力は完全にアティの支配下にあるではないか。

正しく異常。

しかし正常。

それでもアティはリンバウムの人間である。

響界人でもなければ召喚獣でもない。

そしてアティは姿を変えていく。

「な、に？ 何、この感覚。 え？ 剣？」

アティがそれまで俺に向けていた敵意や警戒を薄れていき、虚ろな表情で何かを探すように虚空へ手を伸ばす。

そしてアティはそれを掴んだ。

それは碧色の剣だった。

圧倒的な存在感でそこに君臨する魔剣だった。

アティの髪は暖かな赤色から無機質な白色へと、目の色は蒼から碧

へと変わる。

「あ、れ？」

アティの意識がはつきりとして、今の状況を把握し始める。

今の状況とはつまり、味方の出す召喚獣を目にし気が動転して出所不明の剣を突き付ける女。

「す、すみません！ 私ちよつとどうかしてっ、ってなんですかこの気味悪く碧色に輝く剣は！？ しかも髪が一瞬にして真っ白にっ！！ 私お婆ちゃん？！ マー・アントワネット？！」

凄まじい勢いでテンパるアティ先生を雪野がシラーとした目で眺めている。

ベル嬢はアティを止めようと接近したために叫び声をダイレクトに聞き鼓膜に多大なダメージを受けて地にうずくまり痙攣してる。南無。

リーナは何時の間にか耳栓をしている。

パーフェクトメイド、ここに極まる。

かくして緊迫していた筈の空気は壊れ和やかな空間が訪れる。

しかし、その剣をどうにかしてくれよ、先生さん。

八話（前書き）

今回、村正のとあるキャラの台詞を引用してみた。
村正で一番好きなキャラだったりする。
グリリバだし。

八話

なんとかかんとか剣を仕舞う（送還）と、俺達は二手に別れた。一つは海岸沿いにサモナイト石を探索する俺とアティのコンビ。もう一つはベル嬢を護衛する為のリーナと雪野のコンビ。

チーム決めの時にリーナが今にも泣きそうな顔をしていたが今回は無視することにした。これで少しでもベル嬢と親睦を深められたらなんて狙いもあるのだが。

……なんか、逆効果な気がしてきた。

「……ってキョウジさん、聞いてますか？」

「御免、考え事をしていた」

アティに話し掛けられ思考を切り替える。あれは成るようにしか成るまいしな、心配したところで無駄だろうさ。

「で、何の話だっけ？」

「ですから、目の前の海賊さん達をどうするかと聞いているんですよ」

目の前の海賊。

あの船を襲撃した海賊の頭と育ちの良さそうな顔つきをした優男の召喚師。

海岸を探索しながら歩いていたら奇襲を食らったので麻痺投げナイフで召喚師を無力化して人質に取り人情とかそこらへんの物に引かかる物言い海賊の頭を降伏させて戦闘終了。

途中、杖を槍の様に使い海賊の頭を圧倒するアティという悪夢を垣間見た気がしたが気にしないことにした。

この海賊達は負けたので煮るなり焼くなり好きにしろと言ってはいるがどうしたものか。

セオリーなら尋問して情報を搾り取った後に殺すのが一番なのだが、さて。

「殺すに一票だ。信用できない」

考えたままに意見を口にする。

まあこのタイプは報復とか考えそうにないけど一応賊だし。それに対してアティは反対の意見を出した。

「私はこの人達に協力してもらおうと思います」

「ふむ……」

協力。

もしそれが実現したなら相当な戦力が手に入る。

ハイスピードオカマに鉄砲娘、召喚師に拳法家。

どれも相当な実力を持っていることは今までの戦闘で確認済み。

オマケに頭は人情家だから誘導もしやすそうだ。

お、意外と美味しいかもしれないな、これ。

なら早速引き込んでみるか。

「なる程、こいつらに仕事の責任をとってもらうのもありだな」

「仕事だと？」

食い付いた。

にやけそうになる表情を引き締め思考を誘導する。

「ああ、大口の依頼だな？ マルティー二家の嬢ちゃんを帝国の軍

学校まで護衛する依頼だったんだがお前等のせいでそれも失敗さ。
幸い護衛対象はまだ生きているがこちらら依頼達成率は完璧だった
のにお前等のせいでその看板にも泥が付いちまった。……さて」

それについてどう思うよ？

そついうと海賊の頭は表情を変える。

コイツは俺とベル嬢が共にいるのを船の上で見ている。
巻き込んだ。

覚悟を決めていたとしても良心を持っている人間の精神にはその事
実は苦痛をもたらす。

下手したらベル嬢は命を失っていたかもしれないのだ。
だが、海賊の頭は頭としての仮面を外さない。

「へっ、だから何だよ？ 非道極まる海賊が人の迷惑を考えるなん
て思ってるのかよ？」

「その意見については同意だが、お前は非道になりきれてないよな、
半端もの？」

「ッ！？」

半端という言葉がキーワードだったのか、その顔に激しい怒りの色
が表れるもまだ仮面は外れない。

「……半端もの、だと？」

「半端じゃないか。非道極まる海賊はそんな意見出さねえよ」

「テメエッ、もっぺん言ってみろ！！」

「何度でも言つてやるよ、半端もの。非道なら笑つてろよ、人の不
幸を、人の死を！」

「なっ、お前は何を言つて……」

ボルテージを上げていく。

怒鳴り散らすヤクザのように、親の敵を罵る子供のように。

「嫌々でやってんじゃねえよ。嫌々で殺された奴の身にも成ってみるよっ！」

胸倉を掴み、持ち上げ、怒鳴る。

「アホらしくてしょうがねえだろうがッ！ アアッ!？」

言葉に少なからず感情が乗る。

命を奪う奴が、これから命のやり取りをする奴がそんな人間らしい感情を見せることに腹が立ったのだらう。

ふざけんな、それじゃ仇を討つ奴がお前を本気で憎めないだらうが。

平静でいらなくなる前に言葉を切る。

「そこまでにしてください。それにあなた方が巻き込まれたのは急な天候の変化であって私達だけの責任、というわけでもないのではないですか？」

それまで口を挟まずにいた召喚師の男が口を開いた。

正直なところ助かった。

俺は自分で思っているよりも直情的みたいで交渉には向いてないな。だが、まだ何とかなる。

むしろ感情を上手く表現することで相手の共感を誘うことも出来るかもしれない。

「本気で言ってるのか？ それは。そもそもアンタらが来なけりや

あの海域を通らなかつたし、アンタらの砲撃で何人死んだと思ってるんだよ？」

「っ、それは……」

この召喚師も本質的に良い奴なのだろう。

だからこいつらは苦しむ。

阿保らしい。

そんなに苦しんでまで得たものでアンタらは幸せになれるのかよ。

俺は絶対なれないと思うぞ。

アンタらの眼は他人のために苦労している奴の眼だ。

他人の心配より自分の心配しろよ。

人間は弱くて、自分のことで精一杯なんだよ。

……感情的に成りすぎた。

そろそろ畳み掛けよう。

「っわけであんた達には協力してもらつ。良いな？」

「……私達が契約を反故にした場合は？」

「銃使いの嬢ちゃんから殺していく」

「あ、貴方はっ！」

「アンタらがその先を言うつもりか？ それにさあ……」

傭兵ってこんなもんだろ？

そう言うと、海賊の頭は数分俯いて考えた後顔を上げて協力の要請に同意した。

その顔は決意した男の顔といった表情を作っていた。

なんでも良いが次について考えよう。

俺はその場をアティに任せ思考回路を起動させた。

で、数分たった後に俺達はベル嬢護衛組と合流して海賊の頭、カイルの船に向かっている。

あの後何故かこちらの話をよく聞くように成った二人を怪しく思ったが、俺の言葉で凹んだところにアティが優しい言葉を掛けて慰めたのだろうと考えた。

流石は教師、上手く導いているようだ。

因みにカイル達とは軽い自己紹介を済ませている。

二人は俺がガキの姿でここまで戦えることに驚いているようだった。

さて、今の状況であるが、

「ソノラっ、もう少し踏ん張れ、今そっちに行く!」

「スカーレル、攪乱に徹してソノラに敵を近付けないようにしてください!」

「無茶言わないでよっ!」

案内された船が反魚人に襲撃されていた。

「あゝあ、取り乱しちゃってまあ……」

「マスター、恩を売るチャンスです」

「この主従は……」

「何してるんですか!? 早く助けないと!」

魚人と不定形生物に囲まれた船を見ながら呟く俺。
好機を指摘するリーナ。

その様子に頭痛を覚えるベル嬢。
助ける気満々のアティ先生。

俺達ってチームワーク悪いな。

「そうだな。リーナ、切り込みよろしく」

「了解、群裂を使用します」

地を一蹴りして敵陣へ弾丸の如き速さで突撃をかけるリーナ。

アティは杖を取り出し探索で見つけた漂流物に偶然紛れていたダークブリンガーのサモナイト石を持ち詠唱を始める。

その額には滝のような汗が流れている。

アティにとってダークブリンガーは召喚の際にかかる魔力的コストが高いのだろう。

なら早く終わらせる必要がある。

俺はパイソンに357マグナム弾を装填し、パイソンを両手でしっかり持ち、片膝について安定をとり狙いを付ける。

俺達と海賊達との初の共同戦線が誕生する。

まさかこの共同戦線が年単位で続くとは、この場の誰もが予想していなかっただろう。

九話（前書き）

最近課題が忙しくまともに書く時間が少ない。
おまけにクオリティも低くなってきた。
次の更新はかなり遅くなりそうです。

九話

斬、斬、斬。

三閃。

走り抜けるついでだと言わんばかりに、しかし正確にリーナは三体のスライムを斬り飛ばし銃使いの下へ辿り着く。

「救援に参りました。お怪我は？」

「だ、大丈夫だけど、あんた誰？」

銃使いの娘、ソノラはリーナへ感謝の意を伝えるが状況を飲み込めていない。

そんなソノラへリーナは銃と弾薬を渡す。

「ハイスタンダード・デリンジャー。22口径の中折れ式で装弾数は一度に二発です。お使いください」

「え、おおっ！？ 銃じゃん！ やっぱこれでしょ！？」

ソノラはデリンジャーに弾丸を装填すると近場の半魚人に向けて発砲する。

弾丸は半魚人の頭に当たりその命を奪う。

「ありがとう！ あんた名前は？」

「エルリーナです、リーナとお呼びくださいソノラさん。後、その銃は戦闘後返却をお願いします」

「えー、ってどうして名前、っと」

ダン、ダン。
発砲、発砲。

ソノラは素早く弾丸を再装填し、飛びかかってきたスライムを撃ち抜く。

が、スライムは銃により穴の空いたその身体をすぐさま元の形に再生する。

「えっ、効いてない？」

「スライムは身体のあるコアが弱点です。なので……」

一閃。

再生を果たしたスライムをリーナが斬り伏せる。

「このように斬撃の方が効果的です。ソノラさんは魚もどきの方をお願いします」

「解った！ 私達、案外良い組み合わせかもね？」

「マスター程ではないですがね」

「……え？」

「……まさか、貴方に助けられるとは思わなかったわ」

「喋らずに手を動かせ」

スカーレルが切り込み、その勢いを殺さないように進行の邪魔に成るであろう敵を恭治が銃で撃ち援護する。

両者の拳動には躊躇いなど微塵もない。

まるで長年連れ添った夫婦の様に通じ合った連携だった。

「貴方、踊るのが上手ね？」

「そうでもない。動きを測定してそれに幾らかの要素を加えてるだけだ」

そこに情熱はなく、あるのは計算式と結果を導く引き金だけ。

斬撃、射撃。スカーレルが敵を一体斬り、その背後に襲い掛かろうとする敵の頭を恭治が撃ち抜く。

一蹴、射撃。頭の無くなった敵の死骸を接近してくる敵へと蹴り飛ばし、動きが止まったところへ恭二が射撃を行う。

斬撃、射撃。弾丸が敵の足を撃ち抜き、動きが止まった敵の首へと一線。

刺突、射撃。横から迫る敵の喉を貫き、反対方向の敵が同時に撃たれる。

回避、射撃。横へ飛び敵の攻撃を回避し、動作直後の隙を狙い射撃。斬撃、射撃。一度血を払うように得物を振り、敵を斬りつけ、スカーレルに敵が寄らないよう恭治が射撃。

投擲、装填。薬莢をシリンダー内から排出しポーチから六発の弾丸を装填。装填途中の恭治に背後から襲い掛かろうとした敵へスカーレルが得物を投げつけその頭部を破壊する。

「冷たいのね、そんなんじゃ女の子は振り向かないわよ？」

「知らん、少なくともあんたに好かれなければ今はそれで良い」

「あら、私は冷たいのも熱いのも好きよ？」

「……ぞつとしないな、それは」

発砲、発砲、発砲。
斬撃、斬撃、斬撃。

片方は冷徹に計算し、片方は情熱に身を焦がしながら戦場に行く。
スカーレルは敵対していたものと共闘する昨日の敵は今日の友といった言葉を頭に浮かべ、そこにロマンを感じたりしていた。
乙女チックなオカマである。

対して恭治はリーナと仕事をしている内に近接型のサポートを体得していたために支援攻撃を上手くやっているが、相方がいつもと違うことで若干やりづらく思っていた。

「……終わるか。相性がいいみたいね、私達」
「勘弁してくれ」

恭治とスカーレルの周りには敵の影がすっかり無くなっていた。

「オオツ!!」

殴る。殴る。

速く重い一撃を魚人に加え、囲まれないように常に移動しながらす

り抜けざまにまた殴る。

「今だ！ 赤いの！！」

「アティですよっ！！」

その言葉に答えながらアティは召喚術を行使し魚人とスライムの群れへ剣軍を落とす。

ダークブリンガー。

黒く禍々しいその剣の群は空中から地表の敵へと穿たれ、激突の衝撃で粉塵を撒き散らし周りの敵の視力を奪う。

「喰らいやがれっ！！」

視力を奪われ身動きのできなくなった敵をカイルが順番に殴りつけていく。

中には手を振り回して暴れながら攻撃しカイルに傷を負わせるものも居た。

だが、例え傷を負ったとしても、

「盟約に応えよ！」

すぐさまヤードが召喚術による回復を行うので身体の損傷を気にせず攻撃を継続する。

アティが攻撃担当ならヤードは回復担当だった。

一人で前衛を勤めるカイルへ召喚術での回復を行う様は的確であり、カイルが疲れ知らずに殴り続けられるのは偏にヤードのおかげである。

敵はその数を減らしていくがそれに伴い召喚師への疲労も蓄積されていく。

疲労がピークに達した時、それは起こった。

カイルと殴り合いをしている数体の魚人がアティとヤードへと走り出したのだ。

「ヤード！ 伏せて！！」

「っ！？」

ダン、ダン。

銃声、銃声。

叫ぶようなソノラの声に地へ屈むヤード。

その頭上を二発の弾丸が通過し、そのまま二人の魚人に直撃する。魚人はよろめき、その脚を止める。

「斬ります」

留めに追いついたリーナが群裂で魚人の首を斬り飛ばす。

「助かりました、ソノラ」

「本当に間に合って良かったよ！」

ダン、ダン、ダン、ダン。

銃声、銃声、銃声、銃声。

別方向で同時に進行する魚人とスライムへ恭治がマグナム弾を撃ち込む。

「後三匹、スカーレル！」

「任せなさい！」

アティの方へ最も近付いていた魚人をスカーレルが攻撃する。
しかし必殺には成らず残りの二匹がその横を通る。

「足止めご苦労！」

恭治がパイソンの銃口を魚人たちに向ける。
そして残りの二発を撃つ。

ダン、カチ。

発砲、不発。

「いいっ!？」

不発弾。

海水により薬莢内の炸薬が濡れて使えなくなった弾を誤って使用可能弾のポーチに入れてしまい、恭治はそれを戦闘の最中に引き当ててしまう。

見事としか言いようがない。

「拙い、アティ！」

残りの一匹がアティに向かい襲いかかる。

「くっ!？」

魚人の拳を杖で防ぐがあっさり弾かれて体勢を崩す。

恭治は再装填をするが構えてる内にアティは拳を受けて致命傷を負うという結末を加速した思考が弾き出す。

だがその結末は覆された。

「……剣っ」

アティがその手に持つ剣で魚人を斬り殺した事によって。

｝ a n o t h e r s i d e ｝

それは神経の反射速度に連動して現れた。

自分の顔に迫る拳が、否、世界中の時間がその速度を大幅に減速させたような不可思議な視界。
それは自分にも例外なく及んでいた。
だからこそ、結末が見える。

「（残酷、ですね……）」

残酷である。

自分を殺しかねない暴力が己の顔に到達する様をゆっくりと眼に焼き付けなければならない。

「（……でも、だめ）」

だが、アティはそれでも折れない。
状況を打破する為に足掻く。

「（まだ死ねない。皆戦ってる、それにあの子を置いて死ねるわけがない！）」

『ならば、その手に我が力を握め』

不思議現象その二。

頭に男の低い声が響く。

「（あ、アナタは……）」

『我を手に取り適格者よ！』

「勝手に私をマ〇ー・アントワネットにした剣を出した時の声！」

『……どちらかと言えば山姥だと思うのだが』

抜剣。

手に現れた剣を引き抜くように振り魚人の首を斬り落とす。

「……山姥」

「アテイ、無事か？」

「頭が白いです」

俯いて何事かを口にするアテイに声を掛ける恭治とアテイの変化を口にするリーナ。

「私は山姥じゃないですよー！！」

どうやら山姥と言われたことにショックを受けたらしく、その碧色に輝く瞳から滝のような涙を流して泣いていた。

十話（前書き）

注意、リーナさんがエロいです。
課題が上手くいかずにカッとなってやりました。
反省します。

十話

戦闘後、アティの持つ剣についてのあーだこーだがあり、それも終わると割り当てられた部屋へ入った。

「お疲れさまでした、マスター」

「ああ、うん、今日は本当に疲れた」

新たな寢床に突っ伏し枕に顔を埋もれさせながら返答する。

大変な一日ではあったが風雨を凌げる屋根と寢床、協力者が出来たことを考えると大変さに見合うだけのモノを得られたように思える。

「護衛対象の就寝時の警護は如何程に？」

「雪野を付けておいたからアイツに勝てるレベルの奴が来ない限りは大丈夫だろうさ」

「安全性は問題なし、ということですか」

雪野レベルの召喚獣を常時召喚し続ける為には相当な魔力が消費されるが、大規模な戦闘を行わない限りは俺も何とかなりそうだから安全性を兼ねてこの方針で行動する。

男の俺が四六時中引っ付くよりは精神的にも楽だろうしな。

「……おおっ？」

「どうかなさいましたか？」

「いや、ちょいとばかりズレただけだ」

起きあがろうとして動作を停止した身体を確かめながら答える。

「身体と魂のズレ、大丈夫ですか？」

「許容範囲内、もう少し無茶しても余裕があるくらいだ」

片目を瞑り、軽くそう答える。
身体と魂のズレ。

憑依召喚によりこの世界に來た俺にとって、この身体は当然ながら俺のモノではない。

そのためかどうかは定かではないが、俺の魂と肉体の繋がりは現状とても不安定なものとなっている。

その不安定さが一定以上になると身体から魂が剥離し始め、繋がりが戻るまで身体を動かせなくなる。

これが一度戦闘の最中に起こって危うく死にかけたことがあり、ズレが起きていないかどうかを確かめることは日課になり始めている。

「そう心配しなさんな、大丈夫とは言いがそこまで深刻でもない。それに、いざとなったらお前が助けてくれるだろう?」

「当然です、マスターと私は一心同体であり連理の枝です。あなたを失わない為なら私は鬼にも悪魔にもなります」

「そうか、俺もだよ」

ポスン

と俺の寝転がるベットに腰を下ろしたリーナが俺の頭を撫でてくる。リーナの手は少し冷たく、髪の毛を弄るような撫で方が時たま混ざりこそばゆい感覚を与える。

「……リーナ」

「はい」

「……………くすぐりたいんだけど」

「申し訳ありません。ですが、今暫しこのままで」

「別に、良いけどさ」

目蓋が重くなる感覚が睡魔の到来を告げる。
その感覚に身を委ねて眠りに付いた。

「……お眠りになれましたか？」

私はマスターの御顔を覗き込みながら尋ねるが、返ってくるのは安らかな寝息だけであり、その寝顔を私が守っていると思うと胸が熱くなる。

「あ、」

暫く眺めているとマスターの口元から涎が垂れてきた。
少し間の抜けた顔をしているが、その顔を私だけが知っていることが嬉しくもある。

「……涎」

ペチャリ

気が付くと私はマスターの口元に舌を這わせ、その体液を摂取していた。

ペチュ、ペチャ

猫が己の身体を舐めるようにマスターの顔を舐めまわす。
その背徳感にこの身を悶えさせる。

「お兄様、少しお話をよろ…し…い、か、…し、」

カチャリと音が聞こえその方向に視線を向ければ護衛対象が驚愕に表情を歪めていた。

私もマスターとのひと時に水を注され怒りがこみ上げてきていた。

「……ふ、」

「ふ？」

ふ、とは何だろうか。

布？

「不潔ですわああああ！！！！！」

「……」

護衛対象は叫びながら走り去っていった。

しかし、不潔ときたか。

可笑しな言い回しですね、マスターの涎のどこが不潔なのだろうか。
これは、こんなにも……

「……んう」

ペロ、ペチャリ、ピチュ

半ば吸い付くようにマスターの御顔を嘗め回す私。

ああ、ますたーはこんなにも……

「……リーナ、滅茶苦茶くすぐったいんだけど？」
「えっ」

ますたー、起きて！？　っ！！

「あっ、きゃあ！？」

「あ、リーナっ！」

ベッドから滑り落ち、落ちた際に後頭部を強打する。

「っ、~~~~~！！」

「おい、大丈夫か？」

激痛。

一瞬頭が割れたかと思うほどの痛みに襲われる。

「い、いつから」

「あー、ベル嬢が叫びながら出て行った時点で」

は、恥ずかしい。

顔から火が出そうなほど熱い。

「あ、あの、マスター、これはですね、その……」

「……気にしなくても、良いよ」

「え？」

マスターは照れくさそうに苦笑しながら言った。

「リーナそういうことされるの嫌いじゃない、寧ろ好きだな。それ

に、なんかエロ可愛い感じがなんとも言えないというか、甘えられると何か支えに成れてるみたいで嬉しいと言うか……。つ、つまりだな」

マスターの顔が羞恥により赤みを増し、視線を反らしながら若干緊張した声で言った。

「好きにして、良いぞ？」

……マスターは私をキyun死させるつもりだろうか。何だこの顔を赤らめはにかみつっ『私をプレゼント（ハート）』発言をする中性的な少年は（リーナ主観）。これはあれか、誘っているのかマスター。乗ります、ええ、乗りますとも、今夜は寝かさないぜベイバー！……落ち着こう。つまりこれはマスターからのお誘いである。しかし原因は私の破廉恥極まりない行動で、けれどもマスターはそれが嬉しいと発言なされている訳で、詰まり………………。。

結論↓マスターが幸せならそれで良いじゃないですか。

「マスターの御心のままに。では、……いただきます」

その後、若干怯え交じりのマスターと一夜を過ごした。

心のメモ帳に記入事項が増えた。

実のところ、マスターは攻めよりも受けだったりするということだ。

｝ another side ｝

ベルフラウの事情

ぼす、ぼす、ぼす

拝啓天国のお父様お母様、私の生徒が可愛いです。拗ねたようで実は照れているその顔は、何を見たのか赤く染まっています。ただ、八つ当たりで私の分の枕を拳のみで八つ裂きにするのはどうかと思います。

……以上、現実逃避でした。

何とかしないと今日の私は枕なしじゃないですか。それはいけません。

枕とは……、つてだからこんなどうでも良いことを考えている場合ではなく、今は枕の救出を優先しなければ。

「あの、ベルフラウちゃん？」

「何よ使用人」

ギン、とばかりにこちらを睨みつけるも歳相応の子供が拗ねているようにしか見えず可愛らしいだけだった。

「いえ、何があつたのか聞こうと思ひまして。あの人になにかされましたか？」

「なっ!？」

ボン、と顔から火を噴いて赤くなるベルフラウちゃん。嗚呼、この

子はなんて可愛らしいのだろう。

「べ、別にお兄様は何もしていません!!」

「私はお兄様なんて一言も言っていないのですが。ところでお兄様
ってキョウジさんのことですか?」

「~~~~~っ!!」

ボタンと音を立てる扉。

ベルフラウちゃんは部屋から出て行ってしまった。

……ちよつと意地悪しすぎた、かな?

ボタンと自分の割り当てられた部屋のベッドに寝そべる。

「……はあ」

溜め息が口から漏れる。

それは自分の子供っぽさに対する呆れと嫌悪から生まれたモノだった。

海賊の船で生活する。

確かにそれは健康を維持するためには必要な選択ではある。

だがこの海賊が居なければ自分達は今頃軍学校に着いていたのでは
と思うと怒りが湧いてくる。

その怒りの儘に船長を貶そうとしても船長が先に土下座をしきて、そんな誠実な相手を貶していいものかと悩み結局感情をしまい込む。数時間もするとそれは泥のように心へ沈殿し、引きずられるように脳の働きも鈍った。

その感情をどうすれば良いか、現状最も信頼している人物に聞こうとしても件の人物はその従者に襲われていたのだ。性的に。

「っ!!」

思い出すと、何だろう、私が箱入り娘だったからだろうか刺激が強いように感じた。もしかしたら、私の年代の子供はあれが普通なのだろうか。

……いや、そんな筈はない、あつてたまるか。

とにかく今は忘れよう。

でないと考え事が出来ない。

……私は親の望む道をそのまま歩むはずだった。

親が幾ら立派だったとしても、私が私個人で誇れることは子供の頃から身に着けてきた習い事や知識程度であり、それも役立つ場は限られているものだ。

私には何もない。何故親の言われたとおりの学校に行くことに自分が納得したのか解らなかった。けれど、今なら解る。

私には何もなかったのだ。そんな私が地位と資産を築いた親に逆らうことは出来ないし、親に逆らってまでしたいことなどなかった。

そんな私に護衛が付くと聞いた。

話を聞くうちにその人に惹かれていった自分がいたことを覚えている。

私と同じ歳だと思われる男の子。射撃と召喚術を使い目標を確実に

倒す狩人、その依頼達成率は驚異的で片手で数えるほどの失敗しかしていないため、彼が所属する商会の信頼をどんどん高めているとか。

何故お父様がそんなことを知っているかと問うてみれば、護衛任務の際に見た彼の従者が可愛らしかったからという何とも言えない微妙な理由であったことはまったくの余談ではあるが。

憧れた。彼は自分で生きていた、私は生かされていた。故の憧れ。

実際に会った彼は私と歳の近い子供とは思えないほどに落ち着いていて、話す内容も興味深いものが多く、少し優しく、力強かった。そんな彼と話したり、彼の嫌味な従者と喧嘩をしたり、少し間抜けだけど優しい先生と話したり。

……何、だ。私ったら結構充実した日々を送っていたんじゃない。

「……何を、悩んでいたのかしら」

私は、気付けば悩みを忘れていた。

「はあ、なんだか馬鹿らしくなってきたわ。悩んでいても私には何も出来やしない。なら何かを出来るようにしなければいけない。でない」と、

私は、自分を誇ることが出来ないから。

明日あたり早速先生に召喚術を学んでみようかしら？

そんなことを考えながら私は眠りに付いた。

明かりを消した部屋には月の光が差し込んでいた。

十一話（前書き）

遅れました更新です。

最近キャラが一人歩きし始めている。

具体的に言っているとアクティブなベルフラウとか。

十一話

早朝。

まだ日が上がる前の空を船の甲板から眺める影が一つ。
ベルフラウである。

「……凄い色。この景色をどう表現しようかしら？　夜が剥がれ落ちるというか、いえ、照らし出すの方が良いわね」

朱が紺へと滲み、やがて青に変わるその空の下。
昨夜とは打って変わって晴れやかな顔のベルフラウがそこに居た。

「早起きは三文の得というのはシルターンの言葉だったかしら？
三文の意味は解らないけれど、確かに得をした気分ね」

久方ぶりにしっかりとした寢床で寝たためか、やけに早起きのベルフラウは甲板から周りの景色を見渡していた。

「？　あれ、何かしら？」

ふと、彼女は森の木々が揺れているのを見つける。

良く眼を凝らせばそこには動くきのこに囲まれた火の玉のような召喚獣がいる。

火の玉はどうやら襲われているようだ。

「……弱いもの虐めは嫌いですわ。雪野、付いてらっしゃい」
「……………」

ベルフラウは船を降りて火の玉のような召喚中の元へと駆けていく。その後姿に白銀の狐は黙って付いていった。

「そこまでにしないで、でないと丸焼きにするわよ！ 雪野が！」
「……………（いつそ清々しいまでの他力本願さに呆れている）」

ベルフラウは森へ入ると同時に高らかにそう宣言した。

ベルフラウは雪野についてあまり詳しくない。

だが恭治とアティのやり取りからそれなり以上の力を持っているであろうと推測していた。

故の冒険とも言えるが、この後に恭治から大目玉を貰うことは明白だろう。

「ニ、ニビ？」

「？」

「？」

「????？」

対して異界の住人達は反応に困っているようだ。

動くきのこの召喚獣には知性がないらしく、獲物が自ら飛び込んできた状況を不思議に感じているようだ。

一方火の玉のような召喚獣には高い知性があるらしく、助けが来た状況に困惑といったところだろう。

「Gi・ggiggiggiggiggugii!!」

きこの召喚獣は獲物が増えたことに納得し、取りあえずベルフラウに襲い掛かった。

三匹のきのはそれぞれベルフラウと雪野を包囲するように素早く移動する。

得物の退路を絶つために自然の中で磨き上げられたその動きは洗練されたものであり、また身体の大きさから考えれば十分に鋭いものであるとも言えた。

しかし、

「……ゴアア!!」

それも格下か同等の相手になら有効な手ではあるが、ランクが違う。雪野はその口から青白い焰を吐き出しきのこを丸焼きにする。

焰はそれだけに留まらず周辺の木を数本ほど焼き尽くしようやく消えた。

「……あ、あら、真っ黒になってしまいましたわ」

数秒ほどその光景に眼を奪われた後、ベルフラウは状況を把握するようにそうつぶやいた。

また、助けられたはずの火の玉のような召喚獣はその威力に恐怖し震えており、その姿は見ている者に哀れみの感情を想起させることだろう。

そして、現状の混沌とした様子を作った張本人である白狐は炭化したきのこの元へとそのそと歩いてゆき、

「……………、……………（パクッ）」

数瞬の間見つめた後、ソレを口に入れて咀嚼した。

「た、食べたっ」

「……不味いのう」

「しかも喋った!？」

どうやら、この狐は人語を話らしい。

——……せよ

暗闇の中、男の人の声が聞こえる。
無機質なその声はまるで責め立てるかのように私に語りかけてくる。

——継……よ

声は続く。

逃げ道などないと告げるように。

—— 継承せよ

声が、止まない。

—— 我を、継承せよ！！

貴方は、だれ？

「……………つはあ」

身体中に纏わり付く嫌な汗で眼を覚ます。

「何、今の……………」

継承せよ、と執拗なまでにあの声は私に語りかけてきた。

いったい何を継承するのは知らないが、それが良いものではない事だけは直感的に解った。

「剣を出した時の声にも似てますが同一のものとは限らない。ここはヤードさんや恭治さんに意見を聞いたほうが良いかも知れません

ね

さて、そうと決めればまずやることをやらなければいけない。

「というわけで、朝ごはんは何だろな」 あ、ベルフラウちゃんもそろそろ起きてるかな？ もしそうなら朝食に誘ってみようかな？」

同じ釜の飯を食べることで人間関係を強化、強い信頼関係を築きましょって教本にも書いてありましたし。

「……ら、おと……く、なさ……」

部屋の中からはベルフラウちゃんの元気な声が聞こえる。きっとあの白い狐と遊んでいるのだろう。

「ベルフラウちゃん？ 一緒にお食事どうですか？」

カチャリ、と音をたてながらドアノブが回る。扉を開けたその先ではベルフラウちゃんが、

「捕まえた、さあ観念なさい！」

「ニビヤビヤ……！？」

見たこともない召喚獣を捕獲していた。

「……事情はわかりました。そのことをベルフラウちゃんが助けたことは立派だと思います。けれど、あまり無茶な行いはしないでください」

「……はい」

口では叱るような言葉を言っているが、私自身の心はベルフラウちゃんが本当は優しい子だと解ったことを喜んでいた。

私の言葉に対するベルフラウちゃんの反応には怒る理由は理解できるけれど間違ったことはしていないと考える子供特有の気難しさのようなものが見てと取れた。

これ以上言っても態度が拗れるだけだろうと考えた私は話を早々に切り上げて別の話題を使い話を盛り上げることにした。

「さ、話はこれくらいにしておいてそろそろ朝ごはんを食べに行きましょう？」

「え、これで終わりなの？ 我が家の教育係はもつと厳しく、まるで粗探しでもするかのようにお説教をしていたけれど」

その言葉を聞いて私は頭が痛くなった。

きつとその人たちはマルティー二家のご令嬢という肩書きが先行しすぎてベルフラウちゃんに厳しく当たったのだらう。

けれど、教育には厳しさのほかにも優しさが必要なのだ。

私は、村のみんなの優しさに答えられるようにと学生時代は勉学に励んでいた。

優しさが私を支えていたからこそがんばれた。

同級生のアズリアは自分の生まれた家以外の理由でも何かの為にがんばっていた。

何故がんばるのかと聞いた時のアズリアの眼が優しい光を灯していたことを私は知っている。

だから私は時に厳しく、また時に優しくベルフラウちゃんを教えていこうと思った。

不安は多いけれど。

「そうですね、……私は怒るよりも笑っている方が好きですし、何よりベルフラウちゃんは賢いですから、きっと私の言ったことを理解して自分なりの考えを作っているのだと考えました」

「そ、そう。まあ当然のことよ！ 自分の非を認めて、確固たる考えを持ち下々の者を導くことこそ上に立つ者の勤めである訳だし……」

……

真っ赤になつてそう告げるベルフラウちゃんはとても可愛らしい。

私にもこんな時代が、………あれ？ 見当たらない。

……まあ記憶の棚をひっくり返すのは後にして今は生徒との交流を深めなければ。

「上に立つ者の勤め、ですか。良い言葉ですね」

「そうね、けど耳にたこが出来る程聞かされてしまえば有難味もどこかへ吹き飛んでしまうわ！」

きつとベルフラウちゃんのお父さんの言葉なのだろう、呆れながらもどこか誇らしげにその言葉を語っている。

「って、話はもういいわ、早く朝食を取りましょうよ、先生？」

ベルフラウちゃんが私の手をとって歩き出す。

今日は、良い一日になりそうだ。

「……うし、第二工程終了つと。サモナイト石を粉末状にするのは骨が折れるな」

朝。

自室の机に向かい銃弾の加工を行っていた。

魔弾を製作する工程で必要なことは弾頭への術式刻印と炸薬に魔力を持たせるための粉末サモナイト石、そして込める魔力の調整であり、今は粉末サモナイト石の作成工程を丁度終了したところだ。

粉末にする方法は鑪に魔力を込め続けながらサモナイト石を削るだけなのだが、鑪に込める魔力を一定に保ち続けながら作業を行うので多大な集中力が必要とされる。

また、粉末状にしたサモナイト石もそのままでは使えず方向性を定める言葉と共に魔力を込める必要がある。

「ガンパウダーと粉末サモナイト石の配分は……、よし、きっかり3：1になつたな」

神木で出来た木箱の中で炸薬と粉末をよく混ぜ合わせ、箱に蓋をした後に箱の上で呪刻の印を結び言葉を紡ぐ。

「『我は壊意であり、戒意である』」

数秒ほど箱の中から光が漏れ、光が治まった後箱を開けると燦銀に

色を変えた炸薬が顔を現した。

「出来は上々だな。さ、弾丸を組み直したらナイフ磨きだ、この島に来てから点検も満足に出来なかったし今回の件は正に渡りに船だったな」

鼻唄なんぞ歌いながら作業を進める。

リーナはまだベッドで寝息をたてている。

コン、コン

「おい、もう起きてる？」

穏やかに眠っているリーナに一瞥を向けていると部屋がノックされて声が聞こえる。

声はソノラのものだった。

「ああ、入っても良いぞ？」

「うん、お邪魔します」

一端作業の手を止めて来訪者を部屋へと招き入れる。

「でこんな朝早くから何の用？」

「ああ、うん、実はさ……」

わずかに言い淀んだ後、ソノラは言った。

「お願い、銃を一丁貸して！」

と。

十一話（後書き）

まったくどうでも良い話だが、この作品はランボウを見たときにランボウが使っていたグレネードアロー（ナパームだったかも）を見て再現できないものと妄想していたら出来た作品だす。

つまり何が言いたいのかというと、近々ベルフラウのスキルに回数限定の範囲攻撃が追加されるかもしれないという予告がしたかっただけである。

十二話（前書き）

この作中に出てくる銃の中には他の作品に出てくる空想上のものが存在します。

実物についても作者の銃に対する知識はまだ甘いため色々と間違っている可能性があります。

この点がおかしい、間違っていると思われるのなら感想の方に報告を貰えるとありがたいです。

十二話

「うわぁ……、見たことない形のものがいっぱいあるよ。あ、これは？」

「モーゼルC96。弾倉がグリップの前についているから重心が安定して目標を狙いやすく、その独特な形からブルームハンドル（箒の柄）なんて呼ばれ方もしている。装弾方が特殊でスライドを引いて10発の弾丸を纏めたクリップを差込み弾丸を指で押して装填するんだ。弾倉が着脱式になっているタイプもあるらしいが俺はこれしかもってないな」

ソノラは机の上に載っているリンバウムではあまりお目に掛かれない拳銃の数々を眼を輝かせて手に取り分析し、質問する。

拳銃と少女というあまり良くない趣味に目覚めてしまいそうな組み合わせだとソノラを見て思いながらも説明は怠らない。

「あ、じゃあこの凄くデカイやつは？」

「それはbig-benという100口径の弾丸を撃つために製造されたリボルバーで、他に100口径を扱える銃が無いから弾丸の名前を取ってそのままビッグベンと呼ばれている。中折れ式で装弾数は四発、二発撃つと壊れますって召喚したときに一緒に張ってあった取扱説明書に書いてあった。規格外の口径のせいで弾丸一発あたりの値段が馬鹿みたいに高いからおいそれと使えない。切り札的なものだな」

「そんなの撃って腕大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないだろうな、てか人間の扱って良い銃じゃないと思う」

「あ、ソレ私も思った。……あ、これは？　なんか変な形してるや

っ」

俺の言葉に納得の意を表したソノラはビッグベンを机に置き別の銃を手にとった。

「シャドーバレル。ブルパップ式を採用した変てこ拳銃なんだけど、ソレのお陰で使いにくいことこの上ない銃になっちまってる。拳銃をブルパップ式にしたためにグリップとトリガーの後ろに弾倉を付けるから構造上弾丸は上から装填しないといけない。そのためサイトで狙えないからレーザー照準気をバレルの下に取り付けたんだろうな。おかげでトンファーにしか見えないよ。口径は10?で装弾数は十発。二十発用の弾倉もあるにはあるけど、ただでさえ狙いつらいのが左右にぶれてもつと狙いづらくなる」

「それって使ってる奴いるの?」

「知らんよ。少なくとも、進んで使用したいとは思わないな。レーザーポインターに頼らないと碌に狙うことも出来ない拳銃なんて」

「やっぱりか」。じゃあ、これ」

「ああ、これは……」

その後、拳銃説明会は20分程続いた。

「で、何が良い?」

「これが良いかな」

ソノラが手に取ったのはS & amp ; W (スミス&ウェッソン)と呼ばれる回転式拳銃だった。

S & amp ; Wはパイソンと同じく・357マグナム弾を撃つ為の銃であり、パイソンを整備に出している時などに替わりとして良く使用していた銃だ。

リーナに持ち込んでもらった弾丸も・357マグナム弾が多いこ

とを考えると同じ種類の弾丸を扱う銃を使うことは良い判断だといえる。

「やっぱり使い慣れていない自動式よりもこっちのほうが良いと思っ
てね」

「うん、良い銃だと思うよ。じゃあこれ、とりあえず弾丸を5ダー
スと簡単な整備用の道具の詰まった箱、それと予備のシリンダーな」
「ありがと、あの小さい奴も中々だったけどやっぱりこのくらいが
落ち着くわ」

銃を持つことで落ち着きを見せるといのは女としてどうなんだ
と思う反面やはり海賊だな等と納得もしてしまった。

「恭治？ 朝御飯が出来たわよ、ってソノラも居たのね。手間は省
けたわ」

そんなこんなで話しているとスカーレルが俺達を呼びに来た。

「この時間帯か、少し早くないか？」

「そう？ 私達はいつもこのくらいだけど……」

「朝は早く食べてその日の方針を決める、うちの海賊達はそうやって
規律を守ることによりいざと言う時素早く動けるよう日々ごろから
訓練しているのよ」

規則正しい海賊というのも珍しいとは思うが、規律を守り仲間意
識を高めチームワークを良くすることは合理的だ。

船では他の海賊たちに比べてきびきびと動くと思っただが、成る程
そんな秘密があったか。

「さ、行くわよ？ 今日はソノラの好きな海老のスープがメインだ

から早くしないとカイルが食べつくしちゃうかもよ?」

「むっ!?! それは急がなくちゃだめだわ!! じゃ、先に行つて
るよ恭治!?!」

ドタドタと騒がしい足音をたてながらソノラは食堂へと向かった。

「随分と中が良いじゃない、ソノラみたいな子がタイプ?」

「そんなんじゃない、ただ同じ銃使い同士話が合うだけだよ。……」

リーナ、朝飯が出来たらしいから起きてくれ」

脈絡も無くからかい混じりに言ってきたスカーレルに対し適当な返事を返し、まだ眠っていたリーナを揺り起こす。

「……………、あ、お早う、ございます、マスター」

眠たげに眼を擦るリーナ。

端から見れば完璧に見えるリーナにも弱点はある。

それは寝起きだ。

起き抜けのリーナはまるで立ち上げたばかりのパソコンのように動作の一つ一つが鈍いため、ベッドから起き上がろうとすると転げ落ちたりと危なく眼を離せない。

そこが可愛らしいといってしまえばソレまでではあるが、再起動するまでにかかる朝の十五分は気が抜けない。

「あら、可愛らしい。戦場で刀を振り回していた姿とは似ても似つかないわね」

「そうだろう、そうだろうとも。例え聖王の泉が干上がろうともリーナの可愛らしさは不変だ」

「それは惚気かしら？ まったく、朝からお暑いことで」

「ご馳走様ご馳走様」とまだ飯も食べていないのに言うスカーレを無視しながら未だに寝ぼけているリーナの手を引き食堂へと向かった。

朝食。

それは端的に言ってしまうえば栄養補給であり、これを行わない場合午前中は活力を得られず最悪の場合まるでゾンビのように一定行動を繰り返すそれはそれは奇妙な生物へと成り下がってしまう。

つまり何が言いたいかと聞かれれば、俺は朝食の重要性について語っているだけだった。

ただ、朝食は重要ではあるが朝の食卓に並ぶものには相応しいものτσそうでないものがある。

今日の前に広がっている光景からそれらを仕分けしていこう。

焼き魚。

これは朝食の定番である。

こんがりと焼けたその様子は秋の味覚である秋刀魚を想起させる。

次に並ぶものは刺身。

釣ったばかりであろうその魚の透き通るような白身は鯛のようにも見える。

そして先程スカーレルの言っていた海老の海鮮スープ。

だしは勿論海老であり、具には貝や魚などの様々な海産物が入りある種の楽園と化している。

だがこの三つはテーブルに所狭しと並ぶ料理の内の四割りではなく、その料理の種類はこの二つを含めた三つだ。

では、残りの六割とは何か。

それは赤い色だった。

それは奇妙でありながら冒流的何かを思い起こさせる形をしていた。

それには足が有り、その足は八本も有った。

テーブルの六割を占める、蛸。

それは清々しいまでに蛸だった。

「おい船長、これはどういうことだ？ 説明してくれ」

「いやな？ ストラの鍛錬が終わって暇だったから昨日の内に仕掛けといた壺を回収してみたら結構な数が詰まってな。ってな訳で今日の朝飯は蛸尽くしだ！！」

ボタン、と後ろで倒れる音がしたので振り返ってみればスカーレルが倒れていた。

どうやら気を失っているようだ。

「お、おい！ どうしたスカーレル！！」
「た、蛸が、…ヌメヌメが……」

スカーレルは蛸が苦手らしい。

普段から女言葉を使うところを見る限り何ら不思議な点は無い。
しかし気を失うのは些かオーバーな気もする。

「蛸か。食うのは良いが多すぎるだろう、これは」
「けど今日中に食わねえと腐らせるだけだろう？」

それにしても異常だ。

活け造りから素揚げ、丸焼きまである。

「かといって、これは……」

「あー、まあ俺も少しやり過ぎたとは思ってはいるがな」

これで少しか、と文句を言いたい気持ちを心の内に押し込めて席に着く。

「あら、見た目の割には結構美味しいじゃない！」

「べ、ベルフラウちゃん？ その、大丈夫？ 身体中が痒くなった
りとか、変なものが見えたりとかしてない？」

「先生、毒キノコでもあるまいし大丈夫ですわ。さ、どうぞ」

「へ？」

「へ？ では有りません、貴女も食べなさい？」

「そ、そんな殺生な！？」

「つべこべ、言わず、食べなさい！！」

横を見ればアティとベルフラウが漫才のようなやり取りを繰り広

げている。

ベルフラウ嬢のようなお偉いさんとこの娘さんは蛸のような禍々しい見た目の食べ物忌避することが多いと思っていたのだが、どうやらそれは偏見だったようだ。

うちのお嬢様はこんなにも積極的に行動している。

「お、スカーレルが伸びてる。昨日兄貴を唆して蛸壺仕掛けさせた甲斐があったね。ふっ、スカーレルの分の海老スープはこのあたしが貰った!!」

反対方向を見ればソノラが一目散に海老の海鮮スープの入った皿をスカーレルの席から強奪していた。

そうか、この惨状を作ったのはお前か。

朝食が終わったら待っているよソノラ、お前には山ほどの説教が待っている。

「……………」

再び視線を前に戻し、息を吐き、新しく吸う。

これより挑むは蛸の群れ。

目の前のこれ等から眼を反らすこと無く、ただ只管に立ち向かうことを心に誓い、

「……………頂きます」

俺は箸をその手に持った。

予断ではあるが、蛸料理はどれも味わいの深いものであり、おれは飽きることなく机上の蛸を喰らい三分の一程減らした。
しかし余ったものがその日の昼食に出され、俺はげんなりとした気持ちになった。

十三話（前書き）

話が進まない。

今回は授業回です。

十三話

「ベルフラウちゃんはシルターンの属性があるようですね」

「それって、私が特別って事かしら？」

授業中、ふとしたきっかけで触れたサモナイト石の発光によりベルフラウ嬢の召喚術適性が判明する。

「選民思想でも振りかざす気ですか？ 下らない。召喚師に求められるものは己の属性に合わせた戦略を立てることの出来る思考だといふのに……。先が思いやられるますね」

「なっ、別に私はそんなことが言いたいのではなくて！」

「では、それは自分は特別でありたいという子供染みた我侭ですね。おっと、実際に子供でしたか」

「貴女こそ、ちんちくりんじゃないっ！！」

「なっ」

その後平常運転だと言わんばかりにリーナがベル嬢に喧嘩を吹っ掛けている光景を俺は気だるげに見つめていた。

何故この子はこんなにもベル嬢を敵視しているのだろうかと考えるも一向に正解には近づけない。

「その辺にしておこうか二人とも。仮にも今は授業中、二人の態度は教えを授かる者として相応しいものなのか？」

「「うっ」」

まあ、この二人は頭が良いから正論を持ち出せば一応の治まりは見せるのだが。

朝食の蛸尽くしのせいで気が滅入っていた俺は五月蠅さに耐えられず喧嘩の流れを強引に断ち切った。

「有難うございます、私だけだったらどうなっていたことか……」
「いや、気にしないでくれ。こちらにとっても召喚術の知識は貴重だからな」

アティの授業を聞いているのはベル嬢だけではないというのも喧嘩を止めた一因となっている。

現状で俺達の使っている召喚術は自己流な部分が多く戦闘で多用するには心許ないものであり、過去には何回か事故も起こしている。記憶に新しい失敗は三ヶ月前に試したシャインセイバーだろうか。適当に魔力の込められた装飾品を闇市場から購入しはぐれ召喚獣の駆除以来の時に誓約の儀式を試した。

召喚自体は成功したのだが問題はその後に起こった。何時まで経っても剣が召喚され続けるという怪奇現象が起こったのだ。

原因は召喚の際に消費される使用魔力の過重装填にあった。その多すぎる魔力を使い切ろうとする力がサモナイト石から生じシャインセイバーの継続召喚という現象に繋がってしまったのだ。

このような失敗は自分の身に危険を振りまく可能性もあるため、召喚術について学ぶ機会は渡りに船だったのだ。

おまけに教育費を取られることなく学ぶことが出来るとなれば受けない理由も無いだろう。

「お互い様ですよ、ベルフラウちゃんに射撃の手解きをしてくれるそうじゃないですか。その事を聞いてからベルフラウちゃんはやる気に満ちているんですから」

「確かにお互い様に見えなくもないが、それだとあんたが得しない

だろう？」

「構いませんよ。私一人で教えるのは少し不安でしたから、意見交換の出来る人がいると少し安心できるんです」

そうは言っても召喚術についての知識はどこにおいても重要なものである。

派閥ならば各家毎の秘伝であつたり、軍ならば戦術的に有効な召喚獣の種類や属性毎に分かれた共同運用方、アウトローの間でも召喚術を使えるのと使えないのでは仕事の状況が大きく違ってくる。

そしてこれらの知識は重要であるが故に金が掛かる。

家ごとの秘伝ならば金を掛けて召喚術の真理を探索し、軍ならば状況想定と実践を行うための金を教育費としてかき集め、アウトローは仕事の成否判定に大きく関わるこの技術を借金してでも欲する（借金をする奴はかなり切羽詰っている奴が多い。召喚術を学べばお釣りがくると考えてのことだろう）。

そんな金の成る木とも言うべき召喚術についての知識を無料に近い状態で提供しようというアティはお人好しにも程がある。

助かっているこちらが言うべきことでもないが。

「そうか、別にそれでも良いけど程々にしとけよ？　そういつの」

「ええ、心がけておきます」

はつきりと返事を返さないアティをジト目で見ながらも以降の授業をしっかりと聞いた。

「では、今日はここまでにしましょうか」

授業が終わったので今まで書いていたノートの記述を見直す。

今日の内容は召喚獣達の世界とその特徴についてだった。

基礎的な知識であるこれらは依頼で戦った召喚獣達の弱点表にはない側面を保管してくれた。

また、俺の属性は鬼と霊であるためか機や獣についての知識が不足していたことも解った。

召喚獣達の特徴を聞いて思ったことは能力の利便性だろう。

身体の大きな召喚獣なら一度の輸送で多くの物資を運ぶことができたり、凍結の術を使える奴なら氷を作り魚介類や肉に代表される食材の新鮮さを保つことが可能など戦闘に関わらずとも産業や商業に対する大きな可能性を持っていた。

こうして考えれば金の派閥が工業や商業などに召喚術を活用することの合理性が窺える。

召喚獣の過剰労働や奴隷化などの様々な問題が多くあるが、それを差し引いてもかなりの利益が見込める。

召喚術に対する規制の緩い帝国ならこれで一財産築けるだろう、等といった金儲けでもするかという考えが浮かんた。

金の派閥の本拠点があるのはファンだったか。

派閥関係の依頼あつたら積極的に受けてみるのもありか？

「じゃあ俺たちは部屋に戻るとするよ。授業はとても解り易かった、

向いてると思うぞ？ この仕事」

「そう、ですか？ なら、もっと解りやすくなるよう頑張らないといけませんね？」

「まあ、あくまでも俺の主観でだが」

「え？ ……あ」

何かに気づいたように俺の机に向かっているベル嬢の様子を窺うアティ（ちなみに俺とリーナは自分の部屋から椅子と海に落ちていた船の残骸から即席で作った机を持ってきて座っている）。

そこには今までノートに書き留めてきた内容を必死に理解しようとするベル嬢の姿があった。

こうなつた原因は俺にもあった。

アティが話す内容の合間に質問を入れている内に講義内容が数段飛ばしで高度なモノに成り変っていたのだ。

そう、俺にとって解りやすいというのは傭兵生活で得た前知識に新たに得た知識を追加したための解りやすさであり、前知識の無いベル上にとって解りやすいかどうかは別の問題なのだ。

俺の要求する知識を自分の中から引き出し理解しやすいように噛み砕いて説明するという点においてアティは教師に向いていると言える。

が、ベル嬢の家庭教師として見た場合は失点だろう。

「……ベルフラウちゃん？ 大丈夫？」

「……………あ、え、ええ、大丈夫。最初にしては難しいけれど、私にはこのくらいが丁度いいわ。あまり簡単だと張り合いがないもの」

と、若干強がりの混じった笑顔でベル嬢が言う。

その向上心の高さに素直に感心した。

ノートを覗き見てみれば板書とそこからくる理論展開でほぼ空白

が無い状態だった。

「これは、見事だ。凄いなベル嬢、まるで研究者のノートみたいに情報量が多くて字が汚い」

「じ、字が汚いのはしょうがないじゃない！」

「いや、貶してるわけじゃない。俺も字が汚いし。それにノートなんて自分が見て解ればいいんだし。この年でここまで思考を広げられることに感心しただけだ」

「か、感心って……」

そこまで言うとベル嬢は顔を赤くして俯いてしまう。

褒められることに慣れていないのだろうか。

しかし凄い。

下手な大人よりも賢いぞ、この子は。

「す、凄く書けてる。……ベルフラウちゃん！ 先生は感動しました！！」

「つて、ちょ、抱きつかないでっ！？」

感極まったアティがベル嬢に抱きついた。

自分の話を良く理解してくれる生徒に感動しているようだ。

なんともまあ平和な光景だ、見てて和む。

「お、皆いるね。ちょっといいかな？」

アティに抱きつかれて暴れているベル嬢を見て和んでいると部屋のドアがノックされソノラが顔を出す。

「どうかしましたか？」

「うん、これからのことで話し合いをするから船長室に集合だってさ」

ソノラの言葉に従い俺たちは船長室へと移動した。

十四話（前書き）

課題で遅くなりました。

話が進まない事が最近の悩みの種です。

十四話

「島の調査ですか？」

船長室。

船のメンバーが全員集まりそれぞれの席に座って意見を交わす。今回の議題は島の調査についてだった。

「ああ、修理に必要な材料を探しがてらな」

「先日のような危険を避けるためにも、この島についてある程度調べておく必要はあるでしょう」

「もしかして、お宝とかあるかもねー？」

「ないない……」

話し合いの空気は切羽詰まったものではなく、その様は気の置けない仲間と世間話をするかのような気軽さが見てとれる。

「でも、調べるとしてどこから手を付けるつもりです？」

「砂浜を歩いてみた感想だがこの島、そうとう大きいぞ？」

アティが意見を述べそれを補足するように恭治が島の規模について主観を交え言及する。

「それなんだがな、この島に流れ着いた時に海の上から俺らは灯りのようなものを見てんだよ」

「灯り、ですか？」

「うん、全部で四つ。ぐるっと島の中心を取り巻くみたいに」

「灯り、か。灯りがあるってことはつまり……」

「そ、ひょっとするとこの島に住人がいるかもねー？」

「もし、そうだったら話を付けて、修理に必要な材料をわけて貰おうって寸法よ」

恭治は考える。

まだ深くへと入った訳ではないが森を見れば材木に成りそうな木々が生い茂り、水の豊かさから食料を得ることも容易であろうことが窺える。

だが見知らぬ土地での伐採は危険だ。

現地に住民がいた場合、価値観や信仰の問題で襲いかかられる危険があるからだ。

また、原住民のタブーに触れず、友好的な関係を気付ければこの島で動きやすくなる。

その点から、島の調査は合理的であると恭治は賛成的に考えた。

「問題は四か所のどこから回るか、ということです」

「俺の勘によれば手前右に揺らめいて見えた赤の灯りが本命だろうな」

「えー！？ 兄貴の勘は当てにならないよ！！ あたしは左手前の紫の光が本命だと思うな、なんかピカピカって光ってたし」

「光っていたというなら右奥で点滅しているように見えた青い灯りもそうでしたが？」

「んじゃ、アタシはあえて左奥の緑の光をオススメしちゃおうと」

ヤードが四か所のどこから回るかと聞き、海賊たちは陽気にそれぞれの意見を述べる。

「おいおい……」

「貴方達、もう少し真面目に考えることはできませんの？」

その様子に恭治とベルフラウは苦笑と呆れの混じった言葉を投げか

けた。

「ってなわけで、お前たちにも意見を聞こうと思ってな」

「そうそう、あんたたちの意見で決まるのよ？ 恭治、アティ」

「え、ええ……！？」

「……」

何というか、本当に陽気だ。

恭治はこの陽気さこそがカイル一家という海賊の骨子なのだろうと思っただ。

家族としての繋がりと温かさ支えられ、その絆で繋がっているからこそこいつらは強いのだとそう考えた。

それが少しだけ羨ましいと恭治は自分でも気付かない心の深淵で思っていた。

「俺はどこからでもいい、無投票で」

「えー？ つまんないこと言わないでよお！」

「まあまあソノラ、四人とも違う意見で五人目は無投票なのだから六人目の意見で決まるわよ」

「あ、そっか」

「てな訳だ、先生。責任重大だぜ？」

「わ、私ですか！？」

カイルの振りに対しアティが素っ頓狂な声を上げる。

「え、えとっ」

「無投票は無しですよ、四つのどれかに決めていただきたい」

「……ヤードさん、薄情です」

どうやらアティは話し合いで自分が決め手になるような状況が苦手

らしく、発言したヤードをむくねながら睨んでいる。

「そうですね、私は……、ヤードさんの言ってた青い光に投票します」

「私ですか!？」

アティの発言にヤードが驚きを示す。

話し合いが終わった後、恭治たちは森へ探索にでかけることとなった。

上を見れば木漏れ日が眼に突き刺さった。

慌てて手を掲げ眼に刺さるそれを防ぎながら眼を閉じる。

視覚を封じて嗅覚や聴覚に集中してみれば、そこには小鳥の囀りと咽返るような自然の匂いがした。

そう思う。

まるで楽園のようだ、と。

「そんで兄貴ったらパンツ一丁で部屋から出てきてさあ、ってどうしたの? いきなり地面に両手を付いて……」

台無しだった。

まあ俺自身こんなロマンチックな思考が似合っているとは思わないが、こうも清々しく妨害された時に沸くこの形容しがたき感情は一体どこにぶつければ良いのだろうか。

だいたい野郎のパンツ一丁の話とか一体誰が得するんだよ、ってカイルは普通に格好良いから需要はあるか。

「ソノラ、何故お前はカイルのパンツの話を持ってくる？」

「恭治が面白い話を聞いて気を紛らわそうって提案したから話したんだけど。……そう、あそこでイチャイチャしている先生と兄貴の図を見て沈んだ気分を紛らわそうとしてね」

森に調査の為に森へ入ってから数十分が経ってアティの丁寧な口調が話題に上がり、カイルの事を呼び捨てに出来ずそれをカイルがかにかいアティがむくれるといった工程が現在三回ほどループしていた。

他人の不幸は蜜の味、とは良く言ったものだ。

他人の幸福は差し詰めにが瓜の味といったところだろう。

そんなこんなで居た堪れなくなった俺とソノラとヤードは何かと話題を提供しながら気を紛らわしていた。

「それにしても驚きました、あなたはもつと話ずらい人だと思っていましたから」

ヤードが俺に対してそんなことを言った。

話しずらいというのはどういうことだろうか。

俺は近寄んなオーラでも出しているのだろうか。

「俺はそんなに取っ付き難い雰囲気を出していたのか？」

「いえ、そうですね、傭兵という者が自分のメンツに傷を付けられて復讐もせずにいることに驚きまして」

実のところ何時報復が始まるか今でも冷や冷やしています、とヤードが続ける。

リンバウムの傭兵は個性が強く性格から戦術、信条まで違つが己の誇りを傷付ける輩を決して許さない事で有名だ。

名前に傷が付けばそれだけ金が稼げなくなると言つてしまえばそれまでだが、本質的に自尊心の強い奴が多く集まっているとここ数年あまりの傭兵生活からそう考える。

かく言う俺も自尊心は割と高めだ。

「今はそんな場合じゃないからな、まずはこれから発生するであろう問題を解決するのが先だ。報復云々はそれから良いだろ」

「できればそのまま忘れていただきたいものです」

しかし自尊心とはどこから沸き出すものなのだろうか。

自尊心は確かに強いが、それと同じくらいに俺は自己を否定したがる。

思考における正負の振れ幅が激しいのが原因と考えると、自尊心とは主体性の強い思考から生まれるものなのだろうという推測が生まれる。

では、俺にとっての主体性とは何か。

そこまで考えて、

「ん？　ねえ、あれ何だろう？」

ソノラの声に思考を中断した。

どうやら目的地に着いたようだ。

（留守番組）

「なんじゃ、まだ拗ねておるのか？」

「……別に、……拗ねてないわよ」

「世間一般ではそれを拗ねてるって言うのよ、お嬢ちゃん？」

恭治たちが森を探索している中、留守番組は暇な時間を過ごしていた。

現在話のネタとなっているのはベルフラウが探索組に置いていかれて若干ながら拗ねている事についてだった。

「ま、気持が解らない訳でもないわ。退屈なものね」

「だから、私は別に……」

若いつて良いわね、私にもそんな時代があったわ。

スカーレルは遠い目でそう言った。

故にベルフラウの訴えは聞き届けられなかった。

「それにしても驚いたのはその子よ。綺麗な毛並みをしていると思って近づいてみたらいきなり喋り出すんだもの」

「私も初めて雪野の声を聞いた時は驚いたものね、でも今は良い話し相手になってくれるし気遣いもできる良い子よ？」

つい先程の事を思い出したスカーレルがそう発言し、ベルフラウが

それに対し意見を述べる。

先程の事とは探索組を見送った後、部屋で待機していたスカーレルが暇を持て余してベルフラウの部屋を訪ねた時に扉の前で眠っていた狐の尾を踏みつけにしまった事だ。

無論怒った狐に追いかけまわされ船内を逃げ回り、現状では互いに和解を果たしているが船内は狐の吐いた炎により所々焦げている個所がある。

「うむ、今でも尾に残る痛みが目の前にいる気色の悪い男を噛み千切れと訴えかけてきているようじゃ」

「本人を前にして気色悪いは酷いんじゃないかしら？」

「雪野も雪野よ？ 玄関の前は危ないってあれほど言ったのに」

ベルフラウとスカーレルと狐、雪野はその後も穏やかに会話を続けた。

十五話（前書き）

島の探索回。

戦闘を書く時が一番楽しいような気がする。
中二病だからだろうけど。

十五話

「……………」

森の中、生い茂る木々の中の一本、その枝の上にリーナは居た。

「……………」

沈黙したままりーナは森の中を見回す。

一回、二回と辺りを見回すと木の上から降りて歩き始める。

数歩程歩くと懷から凝った造りの短刀を取り出し、木の幹に何かを刻み始める。

ガリガリと幹を削り、刻まれた部分には何かの紋様が出来上がった。さらにリーナは懷から小瓶と筆を取り出し、出来上がった紋様へ小瓶から掬った液体を筆で丁寧に塗り込んでいく。

液体は暗い紫色をし、幹に刻まれた傷跡を紫色に染め上げていく。

「……………全行程終了。次は、結び」

さらにリーナは刻印の刻まれた木を線で結んでいく。

上空からその線を見た場合、それは円の中に式を書いた図形、所謂魔法陣に見えることだろう。

「これで『虎バサミ』の設置は完了。後はマスターの援護ですね」

リーナはそう呟くと刀を抱えて森の中へと消える。

残された魔法陣は一瞬紫色の妖しい光を放ちその後大人しくなった。

「うおっ！　なんだ、こりゃ！？」
「うっわー、鉄くずの川だよ……」

恭治達の目の前に広がる光景はこの島にとって異質だった。
視界を埋め尽くす金属製構造物の群れと何かの部品や破損した装甲のようなものが流れる鉄の川、そして
一部の無駄も無く区画整理された輝く街。
金属でできた街並みは自然あふれるこの島には似つかわしく無いほど異質であり、一同はその光景を見て啞然としていた。

「こんなものが、どうして島に？」
「こっちの鉄の橋と言い、どう見ても人の手が加わって……」
「弾薬とかあるかな？　……ないか。あつたとしても規格が違うだろうし」

恭治達はそれぞれの反応を示しながら鋼鉄の街を探索する。
靴と鉄のぶつかり合う音は楽器のようだ。

一回りほど街を見て回ったその時、警報が鳴り響く。

「！？」
「なんだ！！」

赤い回転灯に光が燈ると共に鉄の地面が口を開き、鋼鉄の獣たちが

解き放たれる。

「O1OEF0!？」

「何だこいつら、どこから湧いてきやがった!？」

「ど、どんどん増えてるしい……」

不愉快な機械音声が恭治たちへ敵意を向けて喧しく鳴り響く。

鋼鉄の獣たちは獲物を追い詰めるように恭治たちを囲み、恭治たちは瞬く間に包囲されてしまう。

「DE10CE! DE101ECE!!」

「これは、もしかしてロレイラルの……」

「ああ、機界の召喚獣だな。作業用っぽいけど」

「DE! DE!! DEEEEE!!!」

「来るぞ!？」

召喚獣は包囲が完了すると恭治たちへと襲いかかった。

「どうします!？」

「……機界の召喚獣は身体が金属で構成されている為、生半可な物理攻撃ではダメージを期待できませんね」

アティが意見を求めヤードが答える。

ダン、ダン、ダン

銃声、銃声、銃声

ダン、ダン、ダン

銃声、銃声、銃声

恭治とソノラはそれぞれ引き金を引いて召喚獣達の動きを牽制する。しかし、機界の召喚獣達に当たった弾丸は皮膚に相当する鋼鉄により阻まれその役割を果たさずに弾かれる。

「召喚師組を中心にカイルと俺で近接戦、ソノラ！！」
「へ、つてちょー!？」

恭治は方針を口にしながらソノラへ今まで自分の使っていた愛銃、コルトパイソンを投げ渡す。
ソノラは撃ったばかりの銃は砲身が加熱されている事を知っている為にあたふたとしながら何とかグリップを掴み取る。

「ツーハンド、出来るな？」
「……そういうことか。良いよ？ やってやるうじゃない」

右手にS & a m p ; W、左手にパイソンを持ち、ソノラはゆっくりと腕を上へと持っていく。
狙うは眼前の敵、志すは守り。

「関節や装甲の繋ぎ目とか、とにかく脆そうなところを狙っていけ。カイル、行くぞー!!」
「おうー!!」

カイルと恭治はそれぞれ拳を握り召喚獣の群れへと突っ込んだ。

「オラアッ！！」

カイルの気合の籠った掛け声と共に打ち出される拳が召喚獣を殴り飛ばす。

しかしそれは召喚獣の装甲が多少へこんだ程度の威力であり、召喚獣を戦闘不能へと追い込むには程遠いものだった。

「いいぞ、カイル。……お、りやつ」

地へ這い蹲る召喚獣に対し恭治は追撃を掛ける。

恭治の手には長さ三メートル程の鉄骨が握られている。

恭治は躊躇うことなく召喚獣へそれを叩きつける。

メキヤ

破壊音

鉄骨の重量と恭治の出せる瞬間的な怪力により、それを叩きつけられた召喚獣は金属の拉げる音と共に絶命した。

「はっ、骨のある奴はいねえのかっ！！」

「氣い抜くな、まだ敵は山程居るんだぞ？」

「解ってらい」

「なら良いが、っ！？ こ、のお！！」

カイルに注意を促す言葉を途中で切り、恭治は持っていた鉄骨をアティ達召喚師組を挟んで向こう側に居る敵へと投げつける。

「……おい、今まで何故か気にしちゃいなかったが、お前の腕力可笑しくないか？……そっぴや船の時も」

「ああ、これか？ 拳法家で言うところのストラに似たものだよ。ストラにもあるだろう、肉体を異様に堅くしたり腕力を化け物みたいに強化するやつ。その応用だよ、でなけりゃ銃なんてまともに撃てねえよ」

恭治の言っていることは強ち間違ったものでもない。

ストラが気を用いて身体を強化するのに対し恭治は魔力でそれを行っているに過ぎないからだ。

この二つはガソリンで動く自動車と軽油で動く自動車くらいの違いでしかない。

ただし出力に関してはこれに当て嵌らないという注意書きが必要ではあるが。

故にカイルは恭治の動きは拳法家のそれに当て嵌まらないことからくる違和感くらいしか認識せず、また眼前に広がる大勢の敵対者を相手取することに忙しい為そんなものか程度の認識でこの疑問を思考回路の外へと投げ出した。

「なんだ、馬鹿に静かじゃないか。もうばてたか？」

「へっ、言ってる。まだまだいけるぜえ！！」

二人の勢いは衰えることを知らず召喚獣達を蹴散らしていく。

ダン、ダン、ダン
銃声、銃声、銃声

右左と三弾おきに引き金を引く銃を変えながらソノラは敵の召喚獣へ牽制射撃を行う。

そして今、右手に握るS & amp ; Wの弾丸が尽きる。

「……よっ！」

ソノラは弾丸が尽きたS & amp ; Wのリボルバーをスイングアウトで外し、そのままそれを己の頭上へと放り投げる。

銃はクルクルと回転しながら空になった薬莢を吐きだし空へ。

一方地上のソノラは左手に握っていたコルトパイソンを右手に持ち替え、両手で持って召喚獣のメインカメラを撃ち抜く。

その後、重力に負け地に引き寄せられるように落ちてくるS & amp ; Wと交代するようにコルトパイソンを同工程を用いて頭上に放り投げる。

ソノラは落ちてきた銃のグリップを握り速やかにポーチから弾丸を取り出し即座に装填する。

装填の終わったS & amp ; Wを一端ホルスターへと収めると落ちてきたパイソンのグリップを掴み、先程と同じように弾丸を装填する。

「っ！……結構、きついなあ、これ」

ソノラは、普段は行わない拳銃の二丁同時使用により腕の筋肉を痛め始めていた。

パイソンを持つ右腕を擦りながら周りの状況を確認する。

まず目に入るのは恭治とカイルの暴れっぷりだ。
カイルが殴り飛ばし、体勢の崩れた召喚獣に恭治が止めを刺す。
敵の数は着実に減ってはいるが、それでも倒し損ねた個体が再起動
し召喚師組へと迫っていく。

その様を見てソノラは移動しながらの銃撃を視野に入れながら再び
視線を移動させる。

視線は召喚師組に向かう。

カイルと同様に恭治の怪力について浮かんだ疑問を一端受け流して
いたソノラは、次の光景に目を疑った。

「はぁっ!!」

そこではアティがロッドを用いて目覚ましい戦功を上げていた。
ロッドの先端に召喚獣を引っかけ他の召喚獣へと投げつけ、二三体
ほど密集したところをダークブリンガーで撃ち貫く。

爆散により生じる煙の中でアティの眼が無機質な光を発していた。

アティはその細く脆い身体を最大限に活用し、最高レベルでの戦術
効果を叩き出していた。

それは才能の無い者が努力により手に入れた戦法だろうということ
がはつきり見て取れる動きだった。理に適った戦術、十全に身体を
制御する術、そして何よりもその迷いの無い動きこそが経験に裏打
ちされた絶対的自信を見る者全てに見せつけているのだ。

機能美という言葉がしっくりと来ることだろう。

現に隣で召喚の詠唱をしていたヤードの口は止まりその動きに見惚
れているほどだ。

「あ、ヤードさん!!」

「っ！？　は、す、すいません！！」
「もう、しっかりしてください！！」

ヤードはアティに怒られていた。

ヤードを叱り付けるアティの眼は先程の無機質なものではなく、いつもの優しさに溢れる輝きを灯していた。

「先生、凄い。……私も負けてられない！！」

ホルスターに収めていた銃を再び抜き、ソノラは駆け出す。

一発。

至近距離から発砲。

距離ゆえに弾丸は外れることなく召喚獣の急所を貫く。

その際に銃を横向きに倒し、銃が跳ね上がる反動を利用しその場で回る。

斜め後ろへと移った視界の中で次のターゲットへ狙いを付ける。

発砲。

同時に回転。

弾丸は三メートル先の召喚獣に命中し、召喚獣は踏鞴を踏む。
それを好機とばかりにソノラは召喚獣へと走り寄る。

体勢を立て直した召喚獣が接近するソノラへ迎撃の意図を持って腕を伸ばす。

それに対しソノラは前転を行い召喚獣の斜め後ろへと転がることにより回避。

即座に起き上がり零距离から二丁同時射撃を行う。

召喚獣の装甲は二発の銃弾に耐え切れず、弾丸は召喚獣の内部機関

を貰きその命を刈り取った。

「ふふん、私も中々やれるじゃない!!」

ソノラは不敵に笑いゆつくりと起き上がる。
戦況は良い方向へと向かっていた。

十五話（後書き）

サブタイトルを付けるのならソノラサーカス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4241r/>

サモンナイト【オリ主憑依モノ】

2012年1月10日23時59分発行